き、十四歳にして、父を喪ふ。十九歳にして、進士に登第し、二十四歳の時始めて碩學李延年に見え、語學の正統を得て、從來の空疎の學を悔ひ、專ら着實の學を成さんことを決心す。孝宗の初め、文學博士となる。時に年三十三。當時舉朝、金の兵威に壓せられ、一人の義を唱ふるものなく、國勢日に蹙まりしが、彼れ誠忠の至情、目視するに忍びず、召對に應じ、大學の道は格物にあり、君父の讐は、倶に天を戴かざるの趣旨を言上したるも、用ひられざりしかば、官を去て家居し、子弟を教育して、名聲大に揚り、召命屢々至りしかば、三十九歳の時亦、召されて南康軍に知となり、大に政教の實を擧げたり。彼は先、白鹿洞書院の遺址を修理して、學規を立て、諸生を教へたり。彼が陸象山を招きて、論語を講ぜしめたるは此時なり。又周子以下の祠堂を建て、陶淵明以下の、五賢堂を築きしも此時なり。以後、朱子の生涯は可なり波瀾多く、常に反對黨の迫害に遇ひしも、誠忠の志、依然舊の如く講學の熱心は、四面の批難攻擊の中にありても、泰然自若として、學を竹林精舍に講じて、敢て動ぜず。或は之れを諫むるものあるも、禍福自ら命ありと言ひ、毫も屈するの色なし。適々門人蔡元定、道州に貶せらるゝに當り、來りて朱子に離別を述ぶ。しかも平常寒暖の外、一語他に及ぶなく、前日讀みたる參同契に就き、疑義を訂せりと云ふ。かゝる迫害の間に立ち、怡然として、攻究止まざる如きは、師弟共に、誠に歎賞の外なし。西紀千二百年、七十一歳を以て沒す。

朱子、資性方正、其行狀の規矩に合へる、孔子と好一對と云はる。病中の時など少しく晩起せんことを勸むるものあるも、曙光と共に起床して、直ちに講學す。若し疑義あれば、夜を徹しても、究明せりと云ふ。されば、一代に作れる詩文百二十一卷、語類百四十卷、編纂、註釋の書に至ては、豈啻に等身のみならんや。其勢力の絶倫にして、著作の多き、眞に支那古今を通じて、其隨一に居る。ギリシャのアリストテレテスに比す可きか。

朱子の宇宙論は、周子の太極說と、程伊川の理氣論とを綜合して、一家の見を立

てたるなり。周子は、本體を無極而太極と言ひ、其動的方面を陽とし、其靜的方面を陰とし、陰陽二氣より、五行即ち水、火、木、金、土の五元素を生じ、之れより して、萬物を生ずと云ふ。周子は、陰陽五行は、氣と云へるも、太極の何物なるかは、明言せず。又伊川は、理氣の二元を認め、陰陽二氣交錯して、萬物を生じ、二氣の相交錯する所以は卽ち、理なりと云ふ。勿論理と氣とは、相離る可からざるものなるも、强て之を云はば、理は精神的、氣は物質的なり。

さて朱子は、右の両說を綜合して、宇宙の本体を太極と云ひ、太極を以て、理氣二元を結合せんと試む。太極は、時空を超越せる絕待的のものにして、本体其ものとして、之を太極と云ひ、其作用より見て、理氣の二元と云ふ。朱子は、理氣の二元によりて、現象界を說明し、終極は、太極卽理の一元に歸せしむ。其論理頗る精密を極めたるが、一種汎神論的の說明と、見る可きものあり。

此氣の聚るに及んでは、則ち理も亦在り。蓋、氣は能く凝結して造作す。理は却て情意なく、計度なく、造作なし。只だ此氣の凝聚する處は、理便ち其中に在り。且つ天地の間、人物、草木、禽獸の如き、其生ずるや程あらざるはなし。定めて種子無くんばある可からず。白地に一個の物事を生出す。這箇は都て是れ氣なり。若し理は則ち只是、箇の淨潔空濶底の世界、形迹なし。他に却て造作す可からず。氣は則ち能く醞釀凝聚して、物を生ずるなり。但だ、此氣あれば則ち理便ち其中に在り。

アリストレスの形質論と類似せるものあり。

朱子は、又、伊川を祖述して、人性を本然の性と、氣質の性とに分てり。抑も宇宙の森羅萬象は、理氣二元より成り、氣集つて此形を成し、理も亦之れに備はるものなれば、理より云へば、萬物一源に出で、人と物との區別なし。之れを本然の性と云ふ。されど氣より云へば、其正しきものは人となり、偏るものは物となる。同じく人と云ふとも、聖人の氣は淸純にして、凡人の氣は混濁なり。之を氣質と云ふ

然し本然の性と、氣質の性とは、各自獨立せるものには非ず。譬へば、本然の性は水の如く、氣質は之れを盛る器の如し。器なければ水は盛る能はず。氣質なければ本然の性は依ること能はず。されば、具体的存在としては、氣質の性のみ。氣質の影響を除外し、抽象的に、人の本性を考察して、之れを本然の性と云ふ。聖人の氣質は、清純なるが爲めに、本然の光輝も、曇ることなきも、凡人の氣質は、混濁せるを以て、本然の光輝の完全に發揮せざること、譬へば不淨の器に盛れる水の、透明ならざるが如し。人間に不善あるは即ち、氣質の昏濁なるが爲めなり。されど、氣質は修養に依て、之れを純清ならしむるを得。

孟子の性を言ふは只だ、本然底を說き得たり。才を論ずるも亦然り。荀子は只だ不好底なるを見得たり。楊子は半上半下底を說き得たり。韓子の言ふ所は却て、之を說き得ること稍近しと蓋、荀、楊が說は、既に是ならず。楊子見來ること、端的なり。見に此の如く、同じからざることあり、故に三品の說あり。然も其の言ふこと盡さずして、一個の氣の字を、少しく得ることを惜しむのみ。程子曰く、性を論じて、氣を論ぜずんば備らず。氣を論じて、性を論ぜずんば明かならずと、蓋し此を謂ふなり。

太極本然の妙、萬殊にして一本なり。氣質の性は、二氣交運して生ずるもの、一本にして萬殊なり。

朱子は又、性と情との關係を論じて、性は卽ち體にして、情は卽ち用なりと云ふ。例へば、孟子の所謂仁義禮智は性にして、惻隱、羞惡、辭讓、是非は情なり。本然の性は善なるが故に、發して情となる場合は勿論、善ならざる可からざるも、氣質の性は必ずしも善ならざるを以て、其發して情となれるもの、時に不善あるは止むを得ざるなり。則ち氣質清ければ、其情善なるも、氣質濁れば、其情は惡なり。

朱子の修養論も亦、全く程伊川の說を繼承せるものなり。朱子は、修養の二大綱として居散、窮理を擧げたり。居散とは、一を主として適くことなく、自己の德性

を涵養する所以にして、中庸の尊德性、孟子の存心養性に當る。今日の語を以て云へば、主觀的形式的の修養方面なり。窮理とは、大學に所謂、格物致知に同じ。朱子は敬の一字を、聖門の第一義とし、堯の天下を治めたる根本も、こゝにあり、孔子の克己復禮も、其他聖賢の千言萬語は、要するに皆、敬の一字に包括す可し。程子の學界に於ける功は、其の敬に優るものなしと。さて、敬には、內外の二方面あり。內は心を存して少しも怠らず、外は起居動作を愼むを云ふ。所謂省察は敬の內面的工夫にして、靜坐は外面的の工夫なり。宋の學者は皆、靜坐の功能を說けるが然し、朱子は無念無想、座禪入定は、之れを死敬と斥け、彼の所謂敬は、動靜を貫き、事ある場合も、なき場合も、一貫する所のもの卽ち、活敬なり。

次に窮理に付ては、今日一件をよくし、明日また一件をよくし、次第に習熟する所多くして、初めて一旦豁然として、貫通するを得。其研究の方法種々あり、廣く眼前に展開する事物を、經驗するも一法なり。經史を讀んで、古今の成敗を悟るも一法なり。尙、之れを廣くすれば、上は天文より、下は動植鑛の研究も、窮理ならずんばあらず。こゝが陸象山、王陽明などの朱子を攻擊して、支離と云ふ所以なるも、朱子に從へば、吾人の內面に具はる理と、萬物に備はる理とは、共に宇宙に瀰漫する理の表現なれば、之れを同一視するも可なる譯なり。されば、廣く宇宙の森羅萬象に就て、窮理することも、一の修養たらずとせず。否、此の如きは學者の眼界を廣くし、彼の主觀に專らなるものゝ陷ゐり易き、偏狹の憂少し。東洋人の學問修養上の短所は、餘りに主觀に偏するにあり。此點朱子と陽明との相異なる所なるが、合理的には、朱子を完全とせざる可からず。勿論窮理に偏して、居敬の修養を怠るは甚だ宜しからず。此の如くんば、動もすれば、學者の陷ゐり易き、概念遊戲に耽る憂多し。朱子は居敬、窮理の二は吾人の兩足の加しと云ふ。左足行く時は、右足止まりて身体を支へ、右足行く時は、左足止まりて身体を支ふ。兩々相進止して、目的の地に到達するものなれば、居敬、窮理は車の兩輪、鳥の双翼の如し。

窮理は知に屬し、居敬は行に屬す。こゝに居敬、窮理の論は、知行の關係論となる。居敬、窮理の關係に於て述べたる所はやがて、知行關係論に適用す可ければ、知行の相待ち相離る可からざるや、推想す可し。されど、修養上、假りに先後を論ずれば朱子は知は先にして、行は後なりと云ふ。理を知らずして行ふは、妄行なり。理を知つて行はざるは、徒知なり。徒知と妄行とは、共に戒む可きものなり。知は目にして、行は足なり。目以て行く手を明かにし、足之れに從ふて、歩行は安全なり。されば先後を以て論ずれば、知は先にして、行は後なり。輕重を以て論ずれば行は重くして、知は輕しとは、朱子の斷定なり。論語に、博文と約禮を說き、中庸には、學問思辨と篤行とを說く。何れも、知行の二者兼備を、敎ふるものなりと朱子は考へたり。

朱子の歷史的著作に、有名なる通鑑綱目あり。此は司馬溫公の資治通鑑に基き、孔子春秋の筆法に從ふて、歷代の事蹟を褒貶筆詠せるものにして、其中に充溢する所の根本精神は、大義名分を正すことゝ、國家的精神を皷吹することなり。我國德川時代に、朱子學の官學として大に尊崇せられたるは、云ふ迄もなきが、之れを前にしては源親房の神皇正統記、之れを後にしては、水戸の大日本史は、何れも朱子の精神に則りて大義名分を明かにせるものにして、我國思想界に、貢献せる所甚だ大なるものあり。

朱子は、支那古今を通じての大儒にして、大思想家たりしみならず、又實に、偉大なる敎育家なりき。彼の敎育せる子弟は、甚だ多し。彼れ自身、晩年に至るまで講學と著作とに、其絕倫の勢力を傾注せり。朱子は殆んど其一生を通じて、權臣又は曲學阿世の徒の爲めに、種々の迫害を受けたるも、彼は常に民間の一大勢力たりき。前に述べたる白鹿洞書院は、實に宋代に於ける私學の最も著名なるものなり。

少年老ひ易く、學成り難し。一寸の光陰、輕んず可からず。未だ覺めず、池塘春草の夢。庭前の梧桐、既に秋聲あり。

の勸學の詩は、當時の青年を奬勵せるのみならず、遠く我國の青年をも、激刺する所、多大なるものありき。

朱子は、支那學者としては、稀れに見る格物致知を重んじたる人物なりしかば、今日の教育學に所謂、教授の實質的目的に、多大の價値を置きたるは明かなるが、之れと同時に、体驗的の訓練を尊重し、兒童教育は先づ、洒掃、應對、進退の實地練習より進まざる可からずとなせり。格物致知と共に、誠意、正心を居敬に修養せしめんとし、其れを實地の作業に、關聯せしむる所、彼れの決して、空論的教育者に非ざりしことを、證明す可し。彼れは人性論に於て、氣質變化論を執りたるが、其處に、教育の可能と方針との、基礎を置けるなり。生れて清純なる氣質を、稟有せる聖賢は、措て可なり。しからざる凡人は、氣質を清純に導き、本然の性に合致せしむることに依て、人物の完全は期せらるゝものなりとは、朱子の懷抱せる教育論なり。

朱子の教育上の意見は、其多くの著作の、到る所に之れを發見するを得可きのみならず、彼は堂々と之れを、當時の輿論に訴ふる所ありき。古來、支那の學界を毒すること多大なりし、科舉の制を痛擊せるが如きは、其有名なる一例となす可きか。朱子は科舉の制を以て、經學の賊中の賊と罵り、文學の妖中の妖と嘲り、言々句々實に辛辣を極めたり。

要するに朱子は、啻に宋代理氣説の大成者たるのみならず、實に古來支那の教學を、集大成せる偉大の人物にして、固より彼は、自家創見に富むとは云ふ可からずまた學説上の破綻も無きに非ざるも、此等は以て、彼の學界の貢献を沒す可からず。

第二節　陸象山

朱子と同時に陸象山あり。朱子と相異なる學説を有せり。陸象山の學説を繼承して大成せるものは、王陽明なり。實に朱陸陽明の對峙は、學界の華なり。我國德川

時代に於ても、此對峙は常に學界を賑はせり。

陸象山は、俊傑少年タイプに屬す。三歲にして母を亡ひ、四歲の時、父に從ひて行き、忽ち天地の窮際する所を問ひ、父の答を得ざる爲め、寢食を忘れて考へたりと云ふ。八歲にして、論語を讀み、有子の言の支離なるを疑ひ又、伊川の論の孔孟と相異なるものあるを指摘す。十三歲の時、古書を讀み、宇宙の二字に至り、四方上下を宇と云ひ、往古來今を宙と云ふと解釋せるを見て、忽ち大悟して、宇宙內の事は、己れ分內の事、己れ分內の事は、宇宙內の事と喝破せり。三十四歲にして進士の第に登り、考官呂東萊に知られ、暫く任官せしも、久しからずして之れを辭し、書屋を雲臺山泉右の間に結び、名けて象山と云ふ。四方の學徒雲集して、敎を乞ふに至り、茲に心卽理の學を講じ、專ら本心の啓發に努めたり。三十七歲の時、呂東萊の發意に依り、朱子と信州鵞湖寺に會し、共に其蘊蓄を語る。會するものは東萊、朱子、梭山、復齊、象山の五子にして、何れも當代の碩學なりき。此會に於ては、主として、朱陸爲學上の問題に付て論議し、學問の內容には觸れずして散會せり。後六年を經て、象山は、朱子を南康に訪ふ。朱子大に喜び、共に舟を泛べて樂んで曰く、宇宙ありてより以來、已に此溪山あるも、還た此佳客ありき否やと。彼に請ひて、白鹿洞書院に至り、論語の君子は義に喩り、小人は利に喩るの一章を講ぜしめ、講演の終るや、朱子は席を離れて、賞謝せりと云ふ。襟度の寬大、愛す可きかな。象山は五十四歲、肺患を以て長逝す。

象山の人と爲りは、氣象剛邁、敢て人に下らず。六經我を注し、我六經を注すとも學者苟くも道を知らば、六經は皆我註脚なりと豪語して、眼中古人なし。況んや今人をや。朱子の謹直寬厚なりしとは、甚だ相異なれり。兩儒學風の差は、其因を人物に發すと見る可きか。象山の學風は、直覺的頓悟的にして、頗る禪門の態度に似たるものあり。之れに反し、朱子の學風は、經驗的漸悟的にして、頗る西洋學者の態度に類するものあり。象山の何者にも羈束せられざる、不撓不屈の精神は、其長

所と見られざるに非ざるも、獨往邁進して、他人の長所を採らんとせざるは、偏狹の誹を免れず。朱子が張南軒に答ふるの書に、

象山兄弟は、操持謹質、表裏二ならず。實に人に過ぎたるものあり。惜いかな、自信太だ過ぎ、規模窄狹、人の長を取るを得ず。將に異學に流れて自ら知らざるのみ。

と云へるは適評と云ふ可し。

早熟的の天才、象山は少年にして早くも、哲學的一家の見を持す。彼想へらく、理は宇宙に遍滿す。森羅萬象悉く、此理の外に出るものなく、天地の天地たる所以も、鬼神の鬼神たる所以も、皆此理に外ならず。學問は畢竟、此理を明かにするのみ。而して彼は、此理なるものを唯心的のものと見て、心即理と斷ず。故に曰く心は一心なり。理は一理なり。至當一に歸し、精義二なし。此心此理實に二ある可からずと。既に我心即ち理なりとせば、宇宙は即ち我心、我心は即ち宇宙なり。東海に聖人出づるも、此心同じく、此理同じ。西海に聖人出づるも、此心同じく、此理同じ。南海、北海聖人出づるも、此心同じく、此理同じ。千百世の下、聖人出づるも、此心同じく、此理同じと云へる、實に此意味を極言せるものにして、其如何に自信の強きかを見る可し。象山の心即理の說は、ヘーゲルの絕對的唯心論に似たるものあるも、ヘーゲルは、其唯心論を進化的に展開したるもの、象山には此事なし。

心即理なり、我心は即ち理にして聖賢の心なれば、吾人の修養上努む可きは、唯我心を存養すれば可なり。中庸の尊德性あれば可なり。道問學は必要なきなり。唯吾人は時に私慾の爲めに蔽はるゝを以て、其處に修養の必要起る。吾人の明鏡に比す可き心を蔽ふものは、主觀的には氣禀の清濁、客觀的には習俗なれば、此二蔽を防ぐこと是れ、修養の方便なりと。天地間唯一の理なりと、絕待的唯心論を立しながら、氣禀の清濁を言ふ。そこに論理上の矛盾あること、理氣を二元的に見る朱子

と共に、免れざるなり。されど、傲岸なる象山は、厭迄も朱子の先知後行の論に反抗し、それが爲め、門人の性情問題に觸るゝを喜ばず。嘗て弟子伯敏が性、才、心情の差別を問へるに對し、

吾友、此言の如きは、又是れ枝葉。然りと雖も、此れ吾友の過ちに非ず。擧世の弊なり。今日の學者の讀書するは、只だ是れ字を解するのみ。更らに血脈を求めず。且つ、性、情、才の如きは都て只だ是れ、一般の物事、言偶々同じからざるのみ。

と云へり。想ふに彼は性の清濁、情の動靜と云ふが如き心理的分析を爲すよりも、直に性情を統ぶる所の本心の存養如何と云ふ問題に肉薄し、性情の分析的研究よりも、性情を合一し、全体としての理を見んとして、徹頭徹尾、直覺的に心の内在、至善の本体に、合一せんとしたるものと云ふ可きか。されど、彼の態度は、宗教家ならば別問題なる可きも、學者としては、餘りに、非合理的の態度と云はざる可からず。象山が、孔子の吾道一以て之を貫くと言へるをも、心卽理と同意に解したるが如きは、自信の强き餘に出でたる、牽强と見る可き一例なり。

第三節　王陽明

陸象山の學統を大成して、後世長く、朱子派と覇を爭ふの大因を作れるものは、王陽明なり。陽明名は守仁、明の憲宗の世卽ち、西紀千四百七十二年に生る。豪邁不羈は象山に類す。年少にして、四方を經略するの志あり。壯年の時代には、幾多の危難を体驗せるが、彼が四十八歳の時、寧王宸濠の亂を平定せるは、彼れの武勳の大なるものにして、彼れは實に、稀れに見る、文武兼備の人物なりき。彼れが武勇の一面に、如何に思索的の人なりしかは、彼れが結婚の夕、間行して鐵柱宮に道士に會ひ、之れに養生の說を聞き、遂に相對坐して歸るを忘れたりと云ふ、エピソートに依りても、察するを得べし。五十歳の頃、其學說を完成し、四方の俊才相

競ふて門に集り、致良知の學、漸く旺んなり。然るに五十六歳の時、帝命もだし難く、病を努めて思田の賊を平げ、凱旋の途中、肺患再發し、遂に五十七歳を以て永眠す。門人遺命を求むるや、微笑して曰く「此心の光明亦た、何をか云はん」と。時餘にして逝きしは、其修養の造詣を察す可し。著書には、文集及門人記錄の傳習錄あり。

明代の思想界を支配せるものは、朱子學なりき。永樂年間の撰述にかゝる、四書五經大全は、程朱學の集註にして、進士の試驗には、之れが唯一の依據たりしかば學者研究の範圍限定せられ、學界は行詰りの狀態なりき。此時に當り、學界に清新の學說を提擧し、明學をして意義あらしめ、遂に自ら其盟主となりしものは、王陽明なり。

陽明は、象山の心即理の學說を繼承し、之を以て、孔孟の道統を得たりと爲す。天地の天地たり、萬象の萬象たる、人の人たる所以の理は畢竟、自己の心に外ならず。即ち宇宙內事は、己が分內の事、己が分內の事は乃ち宇宙內事にして、心を離れて物理なく、又物象もなしと云ふ。則ち陽明は、一切の實在は、心の一元に存在するものなれば、朱子の如く、事々物々に付て、其理を究めんとするが如きは、勞して功なき死學なりと云ふ。

夫れ物理は、吾心に外ならず、吾心を外にして、物理を求むれば、物理無し。物理を遺して、吾心を求むれば、吾心又何物ぞや。心の體は性なり。性は卽ち理なり。故に親に孝するの心あれば卽ち、孝の理有り。親に孝するの心なければ卽ち、孝の理無し。君に忠するの心あれば卽ち忠の理有り。君に忠するの心なければ卽ち、忠の理無し。理豈に吾心に外ならんや。晦庵は人の學を爲す所以のものは心と理とのみ、心は一身に主たりと雖も、實は天下の理を管す、理は萬事に散在すと雖も而も、實は一人の心に外ならずと謂へり。是れ其一分一合の間、己に學者の心理を啓いて、二と爲すの弊を免れず。此れ後世專ら、本心を求めて遂に、

物理を遺るゝの患有る所以なり。正に心卽理を知らざるに由るのみ。

陽明は心卽理の根本思想より、致良知の說及、知行合一說を演繹せり。

心卽理の思想は、象山に受けて、之れを精細にせるものなるが、致良知の說は、陽明の創見と云ふ可きものなり。孟子は、學ばずして能くするものは、良能なり。慮らずして知るものは、良知なりと云へるが、陽明は孟子の良能よりも、良知を專ら採用したり。然れども、陽明の良知は、孟子よりも一層博大なり。陽明は心の虛靈不昧なるより、之を良知と名け、良知は心の本体なりとなす。常識上より云へば心は体にして、良知は用ならざる可からず。然るに陽明は、良知を以て心の本体と云へるは蓋、心の實質又は、內容と云ふ程の意味なる可きか。心卽理は絕待にして、宇宙に遍滿し、永遠不滅なるものなれば、心の本体たる良知も又、絕待にして時空を超越せるものならざる可からず。彼は良知を以て、天理なり、聖人なり、眞吾なりと云ひ、或は未發の中、或は太虛とも云へり。

良知は卽ち是れ未發の中。卽ち是れ廓然太公、寂然不動の本体にして、人々の同じく具する所のものなり。

未發の中は則ち、良知なり。前後內外なくして、渾然一体なるものなり。

然らば、何を以て萬人囚有の良知よりして、聖凡、美醜、善惡の差別を生ずるか。其は氣稟の正偏に因る。凡人は氣稟の偏に因り、私欲に蔽はれ、天理に純なること能はず。良知を放つて、求むることを知らず、こゝに、致良知の必要起るとなす。想ふに、陽明も象山と同く、人欲出現の契機に付ては、明答を與へ得ずして唯、人欲を未萠に防ぐと云ふ、意志的、克己的、努力に付て力說せるのみ。

陽明は、大學に所謂、格物致知の致知は、良知を致すの意味なり。卽ち人欲の蒙蔽を拂つて、本然の良知を致すことなり。朱子は、致知は知識を推究するの意に解すと雖も、天下の事物極まりなければ是れ單に、玩物喪志に終らずんば幸なり。眞の知を致す所以に非ず。致知は物に就て必ず、其宜しきを得しむるものなり。卽ち

致知は卽ち格物にあり。格とは正なり。孟子の所謂、君心の非を格すの格なり。物とは意の在る所なり。例せば、意が親に孝するにあれば、親に孝することが卽ち、一の物なり。心外の理もなければ、心外の物もなし。元來心は、至善にして天理なるも、其物に感じ、發して意となる時には、氣稟の偏正の爲めに、善惡の別を生ずるなり。格物とは卽ち、此意の在る所の物の、正しからざるを格すの意義に外ならず。換言すれば、大學の誠意なり。格物卽誠意なり。誠意の必要なるは、吾人は氣稟の偏あるが爲めに意の動く所、過不及あるを免れざるが故なり。意の動くや必ず意のある所の物あり。故に意を誠にするには、其意のある所の物に付て、其正しからざるを格さゞる可からず。是れ格物ならずや。一例を擧げて格物、致知及誠意の關係を見んに、父母に孝行せんと欲するは意なり。孝行の事は物なり。如何に孝行す可きかを知るは知なり。吾人は氣稟の偏あるが爲めに、孝行の意もあり、孝行の道を知りながらも尙、孝行の宜しきを得ざることあり。是れ意の誠ならざればなり。孝行の意を實行して滿足するに至つて、之を誠意と云ふ。孝行の道を知り、必ず之れを實行して而て後、致知と云ふ可く、孝行と云ふことは物なり。事實孝行して缺ぐるなければ、之を格物と云ふ。故に格物は、致知の實なり。知を致せば必ず其意は誠なり。依て、致知を誠意の本と云ふ。かく論じ來れば、格物致知誠意の三者は、三にして、一、一にして三と云はざる可からず。

さて、意を誠にする爲めには、我心の良知を事物に致さゞる可からず。そこに、事上鍛錬の必要あり。宋儒は、靜坐を學問上最も大切なる工夫となせるも、元來心は動靜を兼ね備ふるものなり。然るに世間との交渉を斷ち、靜坐に專らなれば、外見上、其心の頗る收斂するを覺ゆ可からんも、一旦大事に遭遇せんか復、其心の動搖を免れざる可し。しかず、事上に鍛錬せんには。事上鍛錬は卽ち格物致知に外ならず。

事上に鍛錬して、完全に体得体驗せることに非ずんば、眞知とは云ふ可からず。

こゝに知行の合一の說成立す。行に合一したる知に非ずんば、眞の知に非ず。知に合一したる行に非ずんば、眞の行にあらず。二者は決して、相離れて全きを得るものに非ず。朱子の先知後行說の如きは、知と行との眞の關係を沒却せるものなり。眞知眞行は決して、先後ある可からず。何とならば、本來一体にして不離のものなればなり。例へば、好色を好み、惡臭を惡むが如し。好色を見るは知なり。好色を好むは行なり。事實吾人は、好色を見る時既に、之れを好むものにして、好色を見了つて然る後に、好む心を起すには非ず。惡臭を嗅ぐは知なり、惡臭を惡むは行なり。事實、吾人は、惡臭を嗅ぐ時、既に之れを惡むものにして、嗅ぎ了つて然る後別に改めて、惡む心を起すには非ず。

陽明の知行合一論は、ソクラテスの智德一体論と類似せるが如きも、能く其內容を比較すれは、大に相異なるものあり。ソクラテスの智は、主として概念的の智を意味せるが、陽明の知は、行に卽する知なれば、非常に情意的の意味多し。ソクラテスは、吾人の智は、事物の正邪、善惡、美醜を判別するものにして、而て、吾人は正善美を愛し、邪惡醜を惡むが本性なれば、苟も明瞭に、正邪、善惡、美醜を判斷せんか、正善に就き、邪惡に遠かるは、當然のことなりと云ふ。卽ちソクラテスは明智は當然、德行に迄進む可きものとして、智德の一体を論じたるなれば、智と德との區劃は、判然として立ち居るなり。然るに陽明は、行に迄進みたる知に非ずんば、知に非ずと見るなれば、知と行との區劃は、徹去され居るものと云はざる可からず。

陽明の言論は、其性格の迸る所、所謂、談論風發頗る熱意に富めるは、其長所とする所なれども、論理の嚴正は、得て望む可からず。彼れの學說の中核を成せる、格物致知の說の如き、餘りに我田引水的なり。特に彼の學說の最高潮とも見る可き知行合一論の如きは、時弊を矯救するの便意に出でたりとすれば論なきも、眞理を語るものとしては、杜撰の誹を免れざる可し。夫れ、吾人の知識作用は、感覺に起

りて概念判斷、推理に及ぶ。其進むに隨ひ、智識の本色たる、辨異統同の作用の精細を增す。辨異統同の作用の精細を增せば增す程、智の獨立領分鮮明となり、行爲との對照著しくなる。卽ち純粹なる本能的行動には、知と行との差別立たず、二者溶融して分解す可からず。衝動的行動に至るも、情意的色彩濃厚にして、知的要素著しからず。然るに有意行動に進めば、目的の觀念明瞭となり、こゝに智と行との色彩可なり著し。最後に、選擇的行爲に至れば、慾望の宇宙間に、勢力の爭起り、其何れか勝利を得て、決心し行爲に實現する迄に、熟慮の期間あり。此熟慮こそ、智識の眞本領にして、行爲との立、最も明瞭なるものなり。

さて、陽明の先きに擧げたる、好色を好み惡臭を惡むの心理的分解の如きは、感覺の領域なれば、知行の合一せるが如く見ゆるは、當然のことなり。されど、此例の如きものを提げて、凡ての知と行との合一を說かんとするは、餘りに大膽なり。行に迄熟したる知の、完全知なるは明かなり。疊の上の水練の知の不完全にして、實際水中に遊泳しての知の完全なるは、云ふ迄もなし。されど、知には知の特色あり、情意には情意の特色あり。知の特色益々進めば、行との對照彌々鮮明となり、必ずしも合一を說く可からず。吾人の智識高尙に進めば、單なる思辨に終り、行爲に現はす能はざるもの少なからず。行爲に現はす能はざればとて、之れを知に非ずと云ふ可からず。否、行爲に現はれ得るの知は、比較的程度の低き知なり。智識の特色進めば進む程、行爲とは緣遠くなるを常とす。勿論人生は所詮、行爲にかゝる。生きんが爲めには、行爲なかる可からず。智識の如きは、生きんが爲めの境遇順應の手段としてのみ、其必要を生じたりと見られざるに非ざるも、生きると云ふ意味の、高尙になればなる程、智識の領分は、廣がり行くなり。要するに、陽明が、行に合一せざる知は、眞知に非ずとせるは、實踐躬行を奬勵するの熱誠より來れるものにして、單に道德上の範圍に止まるものとすれば、異論なきも、全体的に總括して、主張すると云ふならば、其は餘りに、知とか行とかの意義を、勝手に解釋せる

ものと云はざる可からず。さればにや、彼れも或る場合には、知は是れ行の始めにして、行は是れ知の成るなりと云ひ、又知の眞切篤實なる處、卽ち是れ行、行の明覺、精察なる處、卽ち是れ知と述べて、知行合一論を緩和せり。

若しそれ、陽明、象山の共に、其學說の基礎とせる所の、心卽理の說に至ては、人欲の出處に窮し、善惡の起源に窮し、唯心論を固執しながら、何時の間にか、心外の物を假定し、氣稟の正偏を云々す。論理の矛盾は早く已に、其高弟中にも異論を生めり。

嘉靖六年、陽明五十六歲の時、越にあり。都察院左都御史を兼ね、思田の賊を征討す可き命を受く。時に彼れの肺患大に進み居りしかば、上疏して固辭せるも許されず。止むなく將に、征途に上らんとするの夕、高弟、錢緒山、王龍溪の二人、學說に付て見解を異にし、批判を師に仰ぐ。已に身を戎衣に改め、顏色憔悴せる陽明は、自分の生命の長からざる可きを察し、席を天泉橋上に移して、両人の辯論を聞けり。これ有名なる天泉證道問答なり。

無善、無惡、是れ心の体。有善、有惡、是れ意の動。知善、知惡、是れ良知。爲善、去惡、是れ格物。

此は錢緒山が、陽明の學說を、四句に概括せるものにして、世に四句訣又は四言敎と稱するものなり。然るに、王龍溪は、此說を以て未だ徹底せざるものとして曰く

若し、心体を是れ、無善、無惡と說かば、意も亦是れ、無善、無惡的の意、智亦是れ、無善、無惡的の知、物も亦、無善、無惡的の物。

此二高弟の論爭に對して陽明は左の如く答へたるも、論理の徹底せざるは、依然たり。

二君の見、正に相資て用を爲すにより。各、一邊を執る可からず。我れ這裏の人に接するに、原と此れ二種あり。利根の人は直ちに、本源上より悟入す。人心の本体は、原と是れ、明瑩滯ることなし。原と是れ、箇の未發の中なり。利根の人

は一たび、本体を悟る。則ち是れ工夫にして、人己内外、一聲に俱に透り了る。其次は、習心のある在りて、本体蔽を受くることを免れず。故に且く、意念上にありて、實落に善を爲し、惡を去るを敎ふ。功夫熟して後、渣滓を去り得て盡す時、本体亦た明盡し了る。汝中(天龍溪)の見は是れ、我が這裏其次の爲めに、法を立つるものなり。二君相取りて用を爲さば則ち、中人上下皆、道に引き入る可し。若し各々一邊を執らば、眼前便ち人を失ふことあらん。便ち道体に於て、各々未だ盡さゞることあらん。

利根と鈍根の差は、氣禀の正偏に因ると云はんも、其氣禀の出處、遂に判明せざれば、陽明の唯心一元論は、遂に根底の立たざる憾なき能はず。

以上叙し去り叙し來つて、支那古今の思想界を通觀するに、倫理道德の研究は、殆んど學問の全域に滿ち僅に、先秦時代に於て、一時諸子百家の競起して、人事百般に關する論議研究盛んなりしも、秦の一統以來はまた、學問の範圍偏狹となり、宋に至て、一時思想界の繁榮を見たるも、其學問の範圍は、最早先秦時代の如く、廣範圍に亘らず、理氣の哲學論の如きも、純正哲學に觸れたりとは云ふものゝ、依然として、倫理道德上の問題の基礎たる、性論を立せんが爲めのものにして、智識論も無ければ、宇宙論も徹底せず。即ち支那は、先秦時代の一時を除きては、其思想界は僅に、人事問題のみにして、科學的研究の遂に、起らざりしは云ふ迄もなく、其人事問題も、倫理道德の範圍に限られ、論理學もなければ、美學もなく、況んや社會學と見る可きものもなし。西洋の思想界に比較して、單調寂寞の感多大なるは止むを得ざるなり。唯修養道德の事のみ、西洋に優るあるのみ。其修養道德の事も朱子陽明に至りて、頂點に達し、爾後進展の迹なく明清両朝三百年の長年月も思想界には、陽明以後一人の偉人を出さず、僅に考證學の盛大を致せるのみ。

第五篇　日本の教育

第一章　太古より王朝時代の末迄

第一節　太古の教育

我國太古の歴史は、傳説として之れを聞くの外なきも、然かも、其傳説中に含蓄せられたる精神に付ては、確かに、捕捉す可き眞理なかる可からず。其眞理中、牢固として、千歳の後迄も、炳として日月の光輝あるものは、建國の大詔に依て確立せる、國体の觀念なり。

皇祖天照大神の、皇孫瓊々杵尊を、豐葦原の中つ國に降したまはんとするや、葦原の千五百秋の瑞穗は國、是れ、吾が子孫の王たる可きの地なり。宜しく、爾皇孫、就きて、治らせ、行け、寶祚の隆、天壤と窮さり無かる可し。

ユダヤに豫言あり、印度にマヌの法典あり、されど、如何でか、此建國の大詔に比するを得ん。萬世一系の皇位の基礎は、こゝに確立し、國民道德の根本たる、忠君の思想は、其源泉を得たり。上下茲に三千年、時に隆替榮枯なきに非ずと雖も、建國の大詔の精神は動かず。大伴氏の家訓に「海行カバ、水ヅク屍、山行カバ、草ムス屍、大君ノ邊ニコソ死ナメ、カヘリ見ハセジ」の精神は、日本武士道の萠芽と云はるゝも、忠君の精神は、國初より、國民の等しく懷抱する所にして、豈啻に武人の專有ならんや。大國主命が、天孫に先つて早く既に、國土を領有しながら、一たび皇孫の降臨したまふや、何等躊躇する所なく、其國土を皇孫に捧げて、治らしまさんことを請ひ奉れるが如きは、事件の最大なるものなるが、凡て一般臣民の皇室

尊崇、忠君愛國の精神は、太古傳說に瀰漫せる所なり。

忠君の至誠はやがて、武勇を生む。太古草昧の世は、一方に、猛獸、毒蛇と戰はざる可からず。一方に、到る所の蠻敵を、征せざる可からず。かくて生存競爭に打勝ち、君家を安泰ならしめんには、武勇は最も必要なり。我大和民族の能く、葦原の瑞穗國を平定せるは、之れを證して餘りあり。素戔嗚尊が、八岐の大蛇を殺したまへる神話の如きは、何れの意味に解するとも、武勇の行爲たるに異論なからん。

又我國太古の民も、社會進化の順程を追ふて、八百萬の神を拜する、多神教たりしは云ふ迄もなきが、同時に、早くも、祖先を崇拜し、特に英雄を、神とし祭るの風ありしものゝ如し。夙に、太占、石占、盟神探湯などの行はれたるは、神意を窺はんとせるものにして、禊祓、祈禱などの行はれたるは、神と清潔の聯想にして、清潔をやがて精神的に移しては、正直を學ぶの風を生じゝなる可し。

又吾人が神代史を讀みて、最も深く感ぜらるゝ所のものは、我大和民族の、頗る現世的、樂天的なりしことなり。神代の神話に、陰慘の影なく、未來の觀念なきは希臘神話に髣髴たり。是れ印度の神話などと比較して、大に相異なる所なり。同時に、樂天的なりしことは、天照太神の、天の岩戸隱の一節を見れば、十分に之れを證明して餘りある可し。

大和民族は、現世的、樂天的なりしと同時に、大に調和的なり。天照太神が、天孫に授くるに、劍、鏡、璽の三種の神器を以てせられたることは、神皇正統記の著者、源親房の早く着眼したるが如く、智仁勇の三大達德を、象徵せられたるものとして、神慮の悠遠を察す可きのみならず、希臘人の智に偏し、羅馬人の意に偏し、猶太人の情に偏するに比較して、如何に人格の調和を尊べるかを、想見し得べきに非ずや。

想ふに、神話、傳說は、其一つ一つをとりて、考證的に、史實上の價値を吟味せんか、恐らく、失望に終らずんば、過誤に陷ゐらん。されど、其全体を總括し、網

羅して、其處に醞釀せる空氣の中に、慧眼を放たんか、時に、正史以上の價値あるものを發見せん。然るを、悉く、史實上の價値なき故を以て、放擲して顧みざらんか國民の特性、國体の特殊、遂に其淵源を失はんとす。危きかな。例せば兒島高德なる人物は、考證的歴史家によりて、抹殺し終られたるが然れども、余想ふに、高德の事蹟や、たとへ正史に入る可からずとするも、當時國民思想の憧憬の、那邊にありしやを知るのよすがとして尙亦、後世の忠君愛國の模範として、敷島の山櫻の、朝日に香ふ情操的價値の上より見れば、正史に優る萬々ならずや。余は此意味に於て、神話傳説等に、多大の興味を感じ、多大の敬意を表するものなり。

さて、日本の文化は、所謂神代と稱する時代に於ても、相當の發達を爲し居たるものと、想像す可き傳説少なからずと雖も、其顯著なる發達をなすに至りし動機は漢學の傳來にあるは云ふ迄もなし。紀元九百四十四年即ち、應神帝の十五年に、百濟王、阿眞岐を遣はして、良馬を貢す。阿眞岐能く經典に通ぜしかば、稚郎子皇子師として學ぶ。次で、博士王仁來朝し、論語及千字文を献ず。皇子また之れを師とす。

想ふに大陸と日本との間に、私的交通の夙に、行はれ居たることは勿論なる可きも、公的交渉は、神功皇后の、三韓征伐を初めとなす。當時三韓は、支那文明を傳へて已に、高度の發達を遂げ居たるに、皇后の一擧にして之れを降服せしめたるを以て見れば、建國以來に錬磨せられ、蓄積せられたる武勇と國力の、可なり大なるものありしを想定す可く、こゝに、從來、孤立の姿なりし我國史も、世界史の潮流に、交渉を有することゝなる。此交渉以來、三韓との往復俄に繁く、我れに歸化する者も少なからず。武勇には優れながら、文明には幾分後れたる我國は、此歸化人及其子孫に依て、開發さるゝ所多かりしは、云ふ迄もなし。阿眞岐及王仁の史實に付ては、疑問ありとしても、三韓降服以來、漢字漢學を初め、幾多文明的の事物の輸入せられて、日本人の社會生活に、一新面目の開かれたるは、疑ふ可からず。特

に、王仁を祖とすと稱せられたる、西文首氏と、阿知使主を祖とすと稱せられたる東文直氏と、弓月君の子孫と稱せられたる、秦公氏などが、歴代の文化的事業に、貢献多かりしことは、明治維新の際、英、米、佛、獨の御傭人の、明治文化に、多大の影響を與へたるにも、勝れるならんか。さて、東西の文氏は、何れも、其下に央部の民を有し、專ら、文筆を以て、朝廷に仕へたり。これより、漢字の用法、漸く弘くなり、教育も意識的に行はるゝに至れり。勿論、我國に最初に傳來せる書籍が、論語と云ふ儒教の經典なりしことは、國民思想に、變革を生ずるが如き因を爲さゞりしは明かなり。何とならば、儒教は、人倫道德を說ける、極めて穩健常識的のものにして、當時日本には文字こそ無けれ、事實としては、儒教の訓は、已に存在し居たる可ければなり。但、日本と支那とは、建國の精神を異にせるものから、儒教に伴ふ革命思想が、幾分在來の國体觀念と矛盾する所無かりしや、多少の疑なき能はず。仁德天皇の、民の富めるは、朕の富めるなりとの仰せ言は、其一閃光と見られざるに非ざるも、調和性に富める日本人は、何時の間にか、之を抹消して唯、儒教の人倫觀念のみを採用せり。

儒教の傳來に依て、文字及現世教育の俄に、進運に向ひし我國は、間もなく、佛教の渡來に依て、其思想界に一大躍進をなすに至れり。之れより先、支那は、魏、晉、南北朝の時代に、佛教頗る盛大を極め、其延長は早くも朝鮮に及び、遂に欽明帝の十三年即ち紀元千二百十二年、儒教傳來より二百六十八年、我國に渡來せり。儒佛二教の傳來は云ふ迄もなく、啻に、其思想のみならず、之れに附隨して、種々の文化を將來せる爲め、日本の文物は、急速度の發展を遂ぐるものありしは、想像に難からず。卽ち、儒教には周代の制度、佛教には、宗教中心の各種藝術の附隨したることは勿論なり。特に聖德太子と云ふ、日本の一大天才が、佛教を篤信せられしことは、啻に、佛教の發展のみならず、日本の文化に影響を及ぼす、大因を爲せるは明かなり。書記には太子を讃美して、

生れながらにして、能く言ひ、聖智有り。壯に及んで、一たびに、十人の訴を聞きて以てあやまたず。兼ねて未然を知り給ふ。且つ內教を、高麗の僧惠慈に習ひ外典(儒書の事)を、博士覺哿に學び給ふ。兼ねて悉く達し給ひぬ。

とあり。太子には法華經、維摩經、勝鬘經の疏の著作あり。又憲法十七條あり。此等に內含せられたる觀念より推想すれば、太子の讀書範圍は、非常に廣汎に亘りしものと見らる。尙、太子が留學生を送りて、隋と國交を開かれしことも、注目に價すること大なり。則ち從來は、三韓を介して、支那文明を輸入せるもの今や、直接之れに觸るゝに至りしなり。又法隆寺の建立せられたるは、啻に、宗教の爲めのみならず、一種の學問所としてとも見らる。云ふ迄もなく、十七憲法は、法律的のものには非ずして、時弊を匡救する、訓誡的、警告的のものなり。則ち要言すれば、教育的性質のものなり。其功果は、中大江皇子に依て、大化の新政としての實を結べり。

第二節　奈良時代

太古以來行はれ來りし、氏族制度は、血族關係を中心として、次第に强大なるものを生じ、中には、皇室を脅威し奉るものさへありき。而て其强大なるもの丶間に、權力競爭の行はれたるは云ふ迄もなく、其れが佛教渡來を機因として、表面上の爭鬪となり、早晩、大改革を加へざる可からざる運に向ひ、遂に、中大江皇子の慧眼と中臣鎌足の英斷とに依て、豪雄蘇我氏の滅亡となり、急轉直下、大化の改新に導けり。

大化の改新の最大なる眼目は、公地公民の制度なりき。從來の氏族制度が、豪族の土地人民の兼併の弊を、大ならしめたることは、慧眼なる中大江皇子等の、見逃す可き筈なく、此弊を矯むることは、改革の第一眼目ならざる可からず。班田收授の法は、其實行手段なり。氏族制度の社會に於ては、各個人は、獨立の單位に非ず

して、氏族中に包括せられたるものにして、單位は氏族其ものなりき。大化の改新は、之れを改めて、個人を獨立せる主体と見んとせり。戸口の交勘、戸籍簿の作製などは、固より、班田の必要上より來りしものなるも、同時に、個人に對する注意の高まりたるものと云ふ可きなり。現在、奈良の正倉院に收藏せられ居る、太寶、天平時代の戸籍の一部を見るに、戸籍簿には、家族關係は云ふに及ばず、戸主の社會的地位に關すること、家族各員の身体上の特徴、疾病、ホクロの有無などさへ、記載せられ、今日の戸籍臺帳よりも、精細なるものあり。

されど、公地公民制度敷かれたりとて、之れを以て、平等の觀念の實現と見んは大なる誤なり。元來、大化の改新及、其延長にして完成せる、太寶律令の制定なるものは、悉く唐制の模倣なれば、其れが社會組織を異にし、風俗習慣の異なれる我國に、徹底的に行はる可き筈なく、多くは机上計畫に終りたるものなるが然し、こゝに此改革に依て、官民の差別階級の、次第に明瞭となり行きしことは、見逃す可からざる事なり。元來支那は、太古より、官民の區別嚴立し、民に對しては、井田法と云ふが如き、今日の社會主義者の主張に似たるものは、極めて早くより行はれ居たるに係はらず、治者の地位に立つ官人と、被治者の地位に置かれたる人民との階級別嚴立し、其官人中にも、地位の高下的階級は、甚だ多かりき。固より、革命の頻發を特色とせる支那には、匹夫より起つて、天下を掌握するに至れるものも、甚だ多しと雖も、一たび天下を奪つて、治者の地位に立たんか、啻に國家の最大權を握る皇帝のみならず、之れを圍繞せる所謂百官なるものは、治者としての一大階級を構成し、人民を瞰下すること、歴代一の異例なしと云ふも可なり。支那の此官尊民卑の觀念、少くとも官と民との階級的對立は、大化の改新以來、次第に旗色鮮明となれり。氏族制度時代には、氏の長なるものは、其氏族を代表して、天皇に仕へたるも、氏の族各員は、直接天皇に仕ふることなく、氏の長を介する間接のものなりき。且、氏族の各員は、大体上、血族關係を主とするものなるが故に、たとへ

自然の間に、幾分の階級形成せられ居たりとしても、其は決して嚴明なるものには非ざりき。然るに、唐制を模倣せる大化の改新は、從來の氏族の各員を、悉く公民として天皇に直屬せしむることゝなしたるを以て、こゝに官と民との階級的區別、次第に嚴立するに至れり。」

特に、大化の改新の、直接參考となり、模範となりしものは、支那歷代中にても制度、文物の最高潮に達したる、唐の太宗、貞觀時代のものなれば、其大規模にして光彩陸離たるものなりしことは、自然に、當時の我國力より見ては、盛大に過ぎたる制度の裁定となりしは、疑ふ可くもあらず。其結果は、都市中心の文化となり貴族的文化の發達となりしは、止むを得ざるなり。其最も明白なる史的事實は、平城京の奠都なり。從來の例にては、天皇の都は、一代毎に變ずるもの多かりき。そこに所謂、都らしき都の成立す可き理由なし。然るに、大化の改新は、唐制を模倣せる、可なり大規模の政府の建設なるからに、最早、從來の如く、屢々、都を移すことの不可能なるは、云ふ迄もなし。一方大化時代より着手せられたる、改新の事業は、孝德より齊明、天智、弘文、天武、持統を經て、文武帝の時代に至り、漸く完成して所謂、太寶律太寶令となりて現はれ、こゝに、帝都確立の機運熟して、次の元明帝の和銅四年に至り、都を平城に遷して、青丹ニヨシ奈良七代の帝都は、定められたり。此奈良の都は、聖武帝の佛敎尊信に伴ふて、前の飛鳥時代と共に所謂天平時代と稱せられ、古代美術の彩花を現出したり。

豈、啻に美術のみならんや、當時の帝都は、官民の精神的方面を支配すること强き、宗敎の中心ともなれり。否、當時の宗敎は、學問、藝術の勢力をも掌握せるものにして、天平美術の發達も、畢竟は、佛敎の副產物に過ぎざるなり。史を案ずるに、平城奠都の初めの養老四年に、早くも、四十八の寺院ありたるが如し。然り、當時の寺院は啻に、學問、藝術の中心たりしのみならず、當時の市街は要するに、寺院を目當てに發達したるものなり。されば寺院の多きは、市街の發達を察す可く

こゝに、帝都は、精神的文化の集中となれるのみならず併せて、物質的文明の集中ともなり、帝都と地方との文明文化の懸隔は、急速に甚だしくなりしものゝ如し。

和銅年間には、日本初めての歴史書なる、古事記三卷の編纂を見、養老年間には日本書紀三十卷の撰修を見たり。此等は固より、歴史を重んずる、支那文明に刺戟せられてより、起りし事なる可きも、そこには、國家意識の發達と共に、國民生活の回顧的意識の增進の、認めらるゝは云ふ迄もなし。又、聖武帝の、東大寺大佛の落成式親臨を契機とせる、僧行基の本地垂迹説の案出は、佛教の國民化の、次第に進みつゝあるを證するものと云ふ可く、天智帝の時、指南車を献ずるものあり、漏刻も同帝の時に作られ、越の國よりは、燃土、燈水の獻上あり、天武帝の時、占星臺の建てられしなど、物質的にも精神的にも、文明文化大に進み、奈良奠都と共に此等のものゝ益進歩したるは、想像に難からず。

想ふに、都市集中の初めと見る可き奈良の都は、皇宮の、從來に比して、大規模のものとなりしは云ふ迄もなく、皇宮を中心とせる、官廳の一劃、嚴として立つあり。此外には、寺院と學校とは、都を飾る大なる設營なりしなる可し。

學校の起源は、天智天皇の時代にあるも、其規模の大に整ひしは、太寶令の制定に依るものなり。太寶令の一部を成せる學令には、大學及國學に關する種々の規定あり。多く唐制を模したるものなり。大學は、精しくは大學寮と稱す、式部省の所管たり。寮には頭、助、允、屬の四部の事務官あり、之れに並んで明經、音、書、算の教官あり。博士と稱す。其下に助教あり。明經を學ぶ生徒を單に學生と稱す。單に博士と云へば、明經博士に限れるが如し。定員四百人なり。此學生は、經書を學ぶ前に、音博士に就て、正確なる支那音を學べり。訓讀は、奈良朝に始まりしものゝ如し。隨て學生は、訓讀も學びしものなるが然し、支那音を學んで然る後、經義を學ぶ。されば、音博士の下に、音道の生徒はなかりき。書道も、學生を募集せりや否や不明にして、恐らく、明經の學生は書道をも兼學せるものゝ如し。算道に

は、專攻の生徒三十人あり。算生と云ふ。明經道の教科書は、禮記、左傳の大經と詩、周禮、儀禮の中經と、易、書の小經の七經あり。此中の大小二經又は、中經二經を學習し終れば、卒業と見られて、貢擧卽ち、官吏登用試驗に應ずる資格を生ず。此外に、論語及孝經を兼修せしむることゝなれり。算道の教科書も、唐制に同じ。十日毎に一日の休あり、其前に試問あり。學年末卽ち、七月に大試あり。されど、修業年限も一定せず、唯九年以上の在學は許さず。業績著しきものは、短日月にて卒業し得たるものゝ如し。生徒は必ず、束修を行ひて入學す。束修の禮は、釋奠と共に、大切なる儀式とせられたり。學生は彈琴、弓は許されたるも、其外の作業、遊戲は禁ぜられたり。

大學に入學を許さるゝ者は、五位以上の者の子孫並に、東西史部の子とに限る。五位以上の中には、諸王と諸臣とを包含す。親王家には皆、文學と稱する侍講を置きたれば、大學には入らず。六、七、八位の子は、志願によつて許さるゝことあり。

年齡は十三歲以上、十六歲以下とす。太寶令の職員令に依れば、五位以上の官は、百五十人、六、七、八位の者は、七百六十人と規定され居るも、事實は、兼官其他の事情にて、右よりは少數なりしなる可ければ、大學の學生の數は到底定員に達す可くもあらざりき。大學は授業料を徵收せざりしも、學資は自辨なりしかば、富有なるものに非ざれば、入學は困難なりしなる可く、さりとて、何時の世も同く、富有の子弟は、遊惰に陷ゐり易く特に、令に依れば、五位以上の貴族の子は、何等勳功なくとも、叙位されたり。則ち三位迄の人を父とせる子は、蔭子と云ひ、四位五位の場合を、位子と云ふ。父、一位なれば嫡子は、從五位下、庶子は正六位上、父從五位なれば、嫡子從八位上、庶子從八位下。然るに一方、貢擧に應じて、秀才上々第をかち得たるものすら、正八位上に過ぎず。大學は登龍門には相違なかりしも此やうなる有樣にては、餘り進んで入學苦勉するもの少なかりしは、當然の次第なり。因に、當時業成り、貢擧に應ずる場合の試驗に、六種あり。秀才を最も優とし、

明經、進士、明法、書、算之れに次ぐ。秀才は、政敎の根本問題の論文卽ち、方略策を書かしめ、進士には、治國の要務に付ての論文卽ち、時務策を書かしめたり。多くは、形式的のものとなり終りたるが、吉備眞備等の盡力に依り、奈良時代の終りには、大學も、可かり整備し、生徒も、定員近くなりしものゝ如し。

次に、地方の國學は、國司の管下にあり。大學五十人、上國四十人、中國三十人下國二十人の學生を收容す。年齡の制限は、大學に等しく、主として郡司の子弟を入學せしむ。郡司は、地方の有力者を任用するを原則とせるより、國學は、地方民敎育の爲めになれり。定員の滿たざる時は、庶民の子も、入學を許可せり。而して優秀のものは、中央の大學に進むことを得たり。國學の儒官を國博士と稱す。人を得ること甚だ、困難なりしものゝ如し。

大學の外、中央には、陰陽寮所管にて、陰陽生、曆生、天文生合せて三十人、典藥寮所管にて、醫生、針生、案摩生、呪禁生、藥園生合せて八十二人、雅樂寮所管にて、各種の樂人三百六十四人を養成せり。此等の學校にては、庶民の子弟も入學せしめたり。又國學にも、定員の五分の一は醫生を入學せしめ、醫官を醫師と稱して敎授せしめたり。

想ふに、當時の大學及國學は、唐制を模せるものにて、其敎授する事柄も、支那傳來の科業なりしものゝ如し。されば、日本固有の學問修養の如きは皆、家庭及社會敎育に放任せるものゝ如し。例へば、太古より發達し來れる和歌の如き、たとへ專門に之れを敎授することを、職業とせる者の出でしは、平安の末にありしにもせよ青年の作歌を、先輩の指導添作する位の事は、當然之れありしなる可く、萬葉集卷十七に、大伴家持が自ら、「稚時、遊藝の庭に涉らざるを以て、橫翰の藻、おのづから彫蟲に乏し。幼年未だ、山柿の門を過らず、裁歌の趣、詞を叢林に失ふ」と述べたるより推せば、師に就て、和歌遊藝を學ぶの風夙に、存在せるものゝ如し。而て此等は全く、家庭又は社會の任意に出でしものにて、國家は特別に、何等施設する

所なし。尙、支那傳來の諸學も、民間にて、私的に教授するものあり。特に吉田家は、代々儒醫を兼ね、門弟多かりしと見ゆ。石上宅嗣（いそのかみやかつぐ）は、詩文に長じ、草書隷書に巧なりき。但、當時の書風は唐法に依らず、專ら六朝風を尊重し、晉の王羲之父子を最高標準となせり。宅嗣は、頗る、篤學の人物にて、晩年其舊宇をすてゝ寺となし、寺内の一隅に文庫を置き、芸亭と稱し、好學の士の爲めに、之れを公開せり。實に、我國公開圖書館の嚆矢となす。續日本記卷三十六に、芸亭に付て左の記事あり。

内外両門（儒佛二教を指す）もと、一体たり。漸くにして極むる時は、異なるに似たれども、善く誘ふ時は、殊ならず。僕、家をすてゝ寺となし、心を歸することを久し。内典（佛書）を助けんが爲めに、外書を加へ置く。地はこれ伽藍、事須く禁戒す可し。庶くは同志を以て入る者は、空有に滯ることなくして、兼ねて物我を忘れ、異代來らんものは、塵勞（煩惱）を超出して、覺地に歸せんことを。

又音樂は、雅樂寮にて教授するものゝみにても、非常に多數なりしことは、前に記せる如くなるが、民間教授も亦盛んにして、續日本紀に左の記事あるより推して、其如何に盛大を極めしかを知る可し。

天平六年二月朔、天皇朱雀門に御して、歌垣を覽給ふ。男女二百四十餘人。五品已上の風流あるもの皆、交雜す。其中に正四位下長田王、從四位下栗栖王、門部王、從五位下野中王等を頭となし、本末を以て唱和す。

現今のオーゲストラも、三舍を避くるに非ずや。當時儀式用のみならず、享樂の爲めに、如何に音樂の珍重せられたるかを見る可し。

儒教の、官學として重んぜられしより、道德上、孝弟の道は敬重せられ、歷代、孝子の表賞を見ること多し。されど、忠君愛國の志操は、之が爲めに衰へず。特に三韓との交渉頗出せるより、國家的結合の必要は、常に感ぜられたれば、愛國の精神は、之れに伴ふて發達せり。當時早く已に、忠君と愛國とは、一致不離のものと

せられたることは、日本書記、續日本紀などに、國家をミカドと、訓じたるによりても知る可し。

建國の高祖、天照太神の女性にましますことは、言ふもかしこし。弟橘姫と云ひ神功皇后と云ひ、橘三千代と云ひ、和氣廣蟲と云ひ、女性に有名なる人物輩出せるよりして考ふるも又、奈良朝前後、女帝の多くましますより推測するも、當時我國の女子は、決して、後世の如く、劣等なる地位に、置かれたるものに非ざるが如し。太寶令に於ても、斑田の場合、男子に二段を與ふれば、女子にも、其三分の二を給與し、園地は、男女同額を支給せられしより見れば、女子を見ること、餘り低からざりしものゝ如し。天平勝寶元年の宣命にも「男のみ父の名負ひて、女は言はれぬものにあれや。立雙び仕へ奉りし理なりとなむ思ほす」とあり。想ふに、太古以來、我國の社會は、奈良朝に至ても、依然、夫婦同居すると限らず、多くは、女の家に通ひしよりして、母系制度は事實上、止むを得ざるものとなりしならん。こゝに、女子の勢力劣等とならざる原因の、伏在せるを覺ゆ。但、政府の學校にては、典藥寮に、女醫を養成し、雅樂寮に、女樂人を養成するの外は、全く女子に閉鎖されたり。されば、女子にして漢學を修むるものゝ如きは、極めて稀れなりしなる可し。

第三節　平安時代

權力、文化の中央集注は、益甚だしく、青ニョシ奈良の都も、次第に狹隘を感じ遂に、桓武帝に至て、平安に遷都せられたり。平安時代の初期は、皇威盛大、太和民族の强敵たりし蝦夷も、一時鎭定し、三韓との交渉も、消極的外交の爲めに減少し、留學生の渡支するものは、可なり多かりしが如きも、遣唐使は僅かに二回に止まり、安祿山の變を口實として、菅原道眞の奏請により、遣唐使は中止せられたり。こゝに、平和的文化の醞釀す可き諸因成立して所謂、平安文明の華は爛漫たり。勿論泰平に咲きたる華の、優美艶麗を特色とし、質實剛健の氣宇に乏しくなりしは、

當然のことゝ云ふ可く、「大宮人はははいとまあれや櫻かざして今日もくらしつ」の歌は、文字通りに受取りて差支なし。さて泰平文化は、凡ての事に典例を積重し、朝政は之れに束縛せられて、活きたる政治は行はれず。朝臣は唯、年中行事を反復するのみ。平安の初には、藤氏も未だ勢力なく、其漸く勢力を張るに至ても尙、他の之れに拮抗するものありしが、後には遂に、藤原氏の天下となり、藤氏に非ざるものは人に非ずと、他氏は唯其鼻息を窺ふに過ざざるものとなり終りて、平安の文化は、爛熟期より漸く、衰退の運に向ひしぞ止むなき。かくなりては、文化は益貴族的となり、隨て中央に局限せられて、地方は閑却せられ、文化的にも、經濟的にも中央と地方との懸隔非常に甚だしく、しかも、當時の地方民は、公卿百官を雲上人と心得、全く人種を異にするものと敬仰し、少數の雲上人を養ふ爲めに、地方民は膏血を絞りて、不平も鳴らさず、爲めに、雲上人は、月に憬れ花に戯れ、宮廷を化して、糸竹管弦の歡樂鄕否、麿と貴女の交驩媒介の、社交倶樂部となすに至れり。

公卿百官を雲上人と尊敬し、己れ等の生活を、反省することなき人物のみならば泰平は何時迄も續かんも、不平の徒、横着者は、何れの世にも絶えず。宮廷歡樂の光明の華麗なる反面には、暗黑の陰は、都大路にすら、盜賊横行するに至り、地方は殊に甚だしかりしは、また止むを得ざる結果なる可し。こゝに地方の豪族は、自ら武勇優れ、腕力强きものを養ふて、部下の安寧を保つの必要を生じ、所謂、地方武士なるもの漸く重寶がられ、中央政府も、軟弱の子弟のみにて、名は將軍と云ひ左右衞門などいかめしくも實は、女性に喜ばるゝことにのみ、憂き身をやつす優さ男のみなりしかば、都の治安維持にすら、地方の武士を依賴せざる可からず。武士の勢力の、陰に陽に募り行きしは、當然の事なり。

平安朝となりては、大學寮は、二條大路の南、朱雀大路(現今の千本通り)の東、三條坊門(現今の御池通り)の北、神泉苑の西にありき。其中、西方北部に都堂院あり、一に北堂と稱し、文章道の學舍たり。其南に明經道院あり、南堂と稱す。其南

に算道院、最南に明法道院を置く。東北に廟堂あり。孔子を祭り、歳時釋奠する所とす。延曆の末より、大學別當を置き、大學の事を總裁せしむ。後には此別當の下に、大學頭を置きて總裁せしめたり。

平安の盛時には、勸學田も多く隨て、學生に對する資給も奈良時代に優り、一時漢學の隆盛を極め、博士大家の輩出して、著作するものも多かりき。延曆十年には教官の職田七十三町あり。明經博士の五町を最多とし、他の博士は四町若くは三町を給せられたり。

儒教の性質が、道德の實踐躬行を第一とするよりして、明經博士は、位置最も高く、職田も多く、單に博士と云へば、明經を指すものなりしが、泰平逸樂氣分の、次第に濃厚となりし平安時代には、堅若しき經學よりも、詩文の喜ばるゝに至りしは、當然のことにて隨て、文章道は次第に尙ばれ、文章博士はもと助教として、明經博士の下に屬したるものが、弘仁十二年より、一躍して明經博士の上となり、從五位下の待遇を受くるに至り、其職田も六町に增加せられたり。

諸國の國學も、平安の初期には、大に奬勵せられ、一時全國に普及したるが如きも、教官を得ることの困難と、書籍の容易に得られざりしことゝの爲めに、久しからずして衰微せるが如し。京師の大學も、延喜、天曆の頃には既に、頽勢をたどりしものゝ如し。此は藤原氏の勢力廣大となり、高位高官ならずとも、凡ての顯勢有利の地位は、悉く貧緣情實に依て任用せられ、大學を卒業するも、地位の得がたかりしに因る。延喜式には「凡そ遊學の徒、情に入學を願はば、年の多少を限らず、すべて簡試を加へ、その一經に通ずるあらば、學生に預るを聽せ。但し、諸王及び五位已上の子孫は、簡を煩はさず」とあり。學生の激減せる一證となす可きか。

宇津保物語「祭の使」の卷に依るに、藤原季英と云ふ一俊才あり、苦學二十餘年、博士等其才を嫉みて提擧せず、或機會に、季英は之れを別當に訴ふ。其言に

窓に光朗かなる朝は、眼も交はさず守る。（書を見つめる）光を閉づる夕は、草叢

の螢を集め、冬は雪を集へて部屋に集へたること、年重なりぬ。然はあれど、當時の博士、衰れみ淺く、貪欲深くしして、料賜はらで、今年二十餘年になりぬるに一つの職あてず。兵を業とし惡を旨として、博打、狩、漁に進める者の、昨日今日入學して、黑し赤しの悟りなきが、策奉るを、序を越して、季英多くの序をすぐしつ。

此は誇張多き小說の一節なれば、文字通りに信を置く可きに非ず。特に螢を集め、雪を集めて勉强せりなど云ふは、支那の故事を、其まゝ記せるものに過ぎざる可けれど當時、眞摯なる學生殆んど迹を絕ち、大學寮は、無賴漢の集合所の如き狀態となりしことは、寺院が、惡僧の集合所となりしに、同じかりしなる可し。

さて、平安時代には、官學よりも、私學の盛んなるものゝ多かりしは、一奇とす可きに似てしかも、相當の理由あるが如し。大化の改新以來、表面上は、氏族制度を廢止せるも、因習久しき此制度が、法令の力に依て、一朝に廢滅す可き筈なく、こゝに有力熱心なる氏族のものが、自己の氏族の爲めに、私學を起すに至りしは、自然の成り行きと見る可きか。

私學中、最も古きものは弘文院なり。和氣廣世の同族の爲めに、設けたるものなり。廣世は、敎育に熱心にして、嘗て、大學の別當となりしこともあり。彼は和氣氏の私宅を以て、校舍に充て、內外の經典數千卷を藏し、學料として墾田四十町を寄附せり。

勸學院は、左大臣藤原冬嗣の、嵯峨天皇の御代に、創立せるものにして、藤氏の盛んなる時代には、勸學院も甚だ盛大にして、其勢力大學を凌ぐものありしと云ふ。「勸學院の雀は、蒙求を囀る」と云ふ諺の起りしも、其盛況を語れるものか。塲所は大學寮の南、弘文院の隣にありき。

學館院は、嵯峨天皇の皇后、橘氏の創立にして、橘氏の子弟敎育の目的なりしが後藤氏の手に歸す。其塲所は淳和院に隣れり。

奬學院は、在原行平の創立にかゝる。行平は、嵯峨帝の皇孫なるが故に、其始めは、嵯峨源氏の人を、別當となせるが、崇德天皇の御代より、村上源氏の中院家の人、別當となることゝなれり。且、奬學院の別當は、淳和院の別當を兼ぬる例となり、後世、淳和、奬學両院の別當、源氏の長者云々と云ふ、長き肩書を有するものを、生ずるに至れり。但、淳和院は、淳和上皇の離宮にして後、寺となりて別當を置きしものにて、學問所には非ざりしが如し。然し普通歴史には、奬學院と共に、之れを王氏の學問所と云へり。王氏とは、皇子の裔、三世四世に至て、姓を賜はらざるものを云ふ。中院家は即ち久我家なり。

右に列擧せる私學は專ら、氏族の爲めにする私學なりしが、此等と類を異にする純粹の社會的私學あり。之れを綜藝種智院となす。僧空海の創立する所なり。其主旨は唐には、村毎に閭塾あり、縣毎に、鄕學ありて子弟を敎育せるより、才藝の士多し。我國には、大學あるのみにして、閭塾なし。一般子弟の敎育に不便なり。依て一院を建て、普く無學の者に敎へんとす。但、此學校は、空海の死後久しからずして亡び、其存在期間は、十年に過ぎざりしものゝ如し。

弘文、勸學、學館、奬學の四院は、寄宿制度なりしかば、之れを曹司と云ひ、大學の構外にあるを以て別曹と云ふ。大學内の曹司は、之れに對して、直曹と云ふ。曹司は、西洋中世期の大學の、コレッギウムに類似せるが如し。

直曹の一に、文章院と云ふあり。菅原清公が、延曆二十三年に入唐し、歸朝の後奏請して大學内に建てしものなり。此は東西の二曹に分れ、東には大江氏の學生、西には菅原氏の學生を收容せり。之れが爲め、大學よりは文章院の勢力盛んとなり後には、大學寮全体が、菅原、大江両家の勢力下に、立つことゝなり了んぬ。かくして、本來の官立大學は、嵯峨帝の時代より、全く家學の有樣を呈し、次第に、官學の性質を失ふに至れり。

菅原家は、歴代第一流の學者を出せる爲め、其門に學ぶもの非常に多く、道眞が

異例に依り、儒家に生れながら、藤原氏ならでは、上る可からずとせられたる、大臣の重職に任ぜられたるは固より、其識見人物の凡ならざるに因るとは云へ、其門弟子の支持與て、功なしとせず。現に道眞の流されたる時、時平は、菅家に學べる者を、共に放逐せんとしたるに、諸司の官吏の半が、菅家の門人なりしに、今更の如く驚けりと云ふ。菅家の私塾は、西洞院五條に有りたるが、其文庫より秀才、進士を出すこと、實に百人に近く、世に之れを、龍門に比せりと云ふ。當時、私人の文庫にして、藏書萬卷を越ゆるもの、少なからざりしと云ふ。大江氏の千種文庫は西洞院樋口にあり。數萬卷の藏書ありたりと云ふ。此文庫は、仁平三年に燒失したるが、之れに先つ五六年前、大江匡房の時代には、二條高倉にありたり。藤原忠實の、火災に付て注意したるに對し、匡房は之れに答へて、「日本國失せずば、此文失す可からず。朝家失す可き期來らば、此の文失す可し。火災を怖る可からず」と傲語せるより推して、其内容の貴重なりしを知る可し。

前にも述べたる如く、漢籍を學ぶに、大學にては、正確なる支那音を先づ敎ゆる爲めに、音博士さへありたるが、家塾、私宅の敎授にては、字音迄は、敎ふる能はざりしなる可く主として、訓讀と解釋に止まりしなる可し。特に、支那との直接交渉、少くなり行ける時代に處しては、支那音を學ぶの必要は、事實上益々少くなり遂に後世の如く、漢籍も訓讀、解釋のみを學ぶことゝなれり。其れが爲め、平仄音韻を生命とせる詩に於てすら、作る者は平仄に苦心しながら、讀誦する者は、訓讀すると云ふが如き、奇觀を呈し、それが爲め、日本人の作りたる漢詩は、一代の大家の作すら、支那人の眼には、眞の漢詩と見られず、德川時代に至てすら、然りと云ふ。若し支那音を學ぶこと、初めの如くなりしならば、此の如きことは早くより無かりしなる可し。

當時、實際に重んぜられたる漢籍の敎科書は、孝經、千字文、唐詩百詠、蒙求の類にして此等を入門書として、次に文集、文選、史記などを學ぶ。元來、當時の人

々の漢籍を學ぶは殆んど、詩文を作らんが爲めにして、同時に、政治上の典據を得んが爲めなれば、諳記、諳誦せざる可からざりき。其は非常に困難なる業なれば、要所を抄出して諳記するの風多くなれり。然し、中には記憶力の非凡なるものありて、文選の全書を、一句殘らず諳誦せるものもありたりと傳ふ。後には和漢朗詠集も、必修の書とせられたり。朗詠集は、聯句の優れたるものを集めたるものにして村上天皇は藤原雅材と云ふ一學生の作りし聯句を、絶賞せられ、一躍、藏人に抜擢せられたりと傳ふ。

望レ二メドモ廻翔ヲ一於蓬島ニ一霞袂未レ逢。思ヘドモ二控御ヲ一於茅山ニ一霜毛徒ニ老ユ。

と云ふ句なり。以て當時如何に、詩文の重んぜられしかを察するに足る。こゝに、政治が形式的となり、遊戯化せるは、當然のことゝ云ふ可し。政治上の參考として前に擧げたる書の外、左傳、漢書、禮記、周禮、儀禮、尚書などを研究せるものもありしが然し、眞に救世濟民を志してには非ずして、唯廟堂に政治上の空論を闘はし又、多くは誠意なくして唯、文才を誇らんための上奏文などに、典據とせんが爲めに、外ならざりしものゝ如し。

然り、當時の貴族教育に於ては、漢詩、漢文を作ることを、第一の修養としたるものにして、和魂漢才のモットーはありしとは雖も、當時の大和魂又は大和心の意は、後世の如き國民的精神又は、忠勇義烈、或は敵慨心を、意味するものに非ずして、唯、漢學の智識を、日本流に應用する才能と、云ふ程のものに過ぎず。光る源氏の君が、其子夕霧の元服せる時「なほ才を本としてこそ、大和魂の世に用ひらるゝ方も、強う侍らめ」と、云へるなどに依りて知る可し。

已に漢學と云ふよりは、事實上、漢詩、漢文に憂き身をやつすを貴族の第一の修養とせるより、其れを書き現はす書道の、重んぜらるゝに至りしも、當然の次第にて、漢學と併せて、書道の重んぜられしからこそ、平安時代には、三筆、三蹟など能書の人の輩出せるなれ。九條殿(藤原師輔)遺誡に、左の言あり。

凡そ成長して、頗る物情を知る時、朝に書傳を讀み、次に手跡を學び、其後に諸遊戯を許す。但し、鷹犬、博奕は重く禁遏する所なり。元服の後、未だ官途に趁かざるの前も、其爲す所亦此の如し。

と云へるなど、書道の重んぜられしも明かなり。大内山に、春の花、秋の月を賞するになくてかなはぬものは、絲竹管絃ならざる可からざりしは云ふ迄もなく、當時の貴族は、漢學の素養なきを耻づると、同一の程度に否、後にはそれ以上に、音樂の修養を重んじたるなり。大江匡房の若き頃、藏人出仕にてありける時、女房達、其音樂の素養なきを侮り、和琴を出して、一曲をと所望せり。匡房大に困じたるが、漸く、「おふ阪の關のあなたもまだ見ねばあづまのことは知られざれけり」と云ふ歌をよみて、危くも耻を免れたりと云ふ、エピソートあるより推して、たとへ漢學を學びたりとも、音樂の素養なきものゝ、馬鹿にされたるを見る可し。

音樂の紳士の修養上に、重んぜられしも明かなり。大内山に、春の花、秋の月を

然り、平安朝も、爛熟期を過ぎては、困難なる漢詩、漢文は、少數學者の研究に委せられ、多數の貴族は、次第に之れが修業を怠り、學び易くまた、入り易き和歌にのみ、憂き身をやつすに至りて、和歌の巧拙は、絲竹管絃の巧拙と共に、事實上紳縉の榮辱の分るゝ所となりしは、當然の推移なり。況んや當時は、男女の直接に相見ゆること困難にして、結婚の申込は先づ、戀歌を媒介とせる外、和歌を以て、性的遊戯の第一手段となしたるに於てをや。

こゝに、和歌と假名及、女子との關係を、一言せざる可からず。應神帝以前已に我國特有の神代文字ありと云ふ說は全く、學者の承認を得ず。文字は應神前後、漢書の渡來以後に、用ひられたるものと、爲さゞる可からず。然るに、漢字は、象形文字にして、一字一字に意義あり。さるに日本語は、聲音語に屬す。聲音語は其性質上、語には意味あるも、一字一字には意味なく、唯發音を符表せるのみ。されば漢字を以て、日本語を、其まゝに書く能はざるは當然にして、我祖先が折角、漢書

の渡來せるに拘はらず、直ちに採て、國語に應用する能はずして、如何に苦心せるかは想像に餘りあり。其苦心の結果が、漢字の意義を顧みず單に、其發音のみを利用して國音を表示せる所謂、萬葉假名なるものゝ發明となれり。文字を有せず、隨て、祖先の經驗なり、歷史なりを書き遺すの方法なく、僅に口より耳に傳へて、子孫の記憶に訴ふる外なく、さりとて、稗田阿禮の如き地獄耳の、常に輩出す可くもあらざれば、其不便言ふ可からざる當時に於ては、今より見れば、不便極まる萬葉假名も、唯一の大切なる手段として、用ひられしは當然のことなり。されど、僅に一語を表はすために、二三四五の字劃多き漢字を、用ひざる可からざるの不便の如何に甚だしきかは、萬葉假名を以て書かれたる、萬葉集の歌を見れば、實に思半に過ぐるものあらん。然し我大和民族は、後進文明國民としては、極めてふさはしき且つ、大切なる折衷調和性に富みたる民族なりしかば、何時迄も、かゝる不便なる狀態に、甘んず可きに非ずして、遂に、聲音語を表はすに便利なる假名を發明せり。普通歷史にては、片假名は、吉備眞備の發明にして、平假名は、僧空海の發明なりしと云ふ。されど、此二人の偉人も、突如として、自分一己の力にて、之れを發明せりとは信じがたし。想ふに、佛敎傳來して、僧侶が、其師の講義などを筆記するの塲合、萬葉假名式にては、如何にも不便なるより、略字を用ふること習慣となり、其中便利なるものは、相互に傳へ傳へられ、漸く廣く用ひらるゝに至りしものを、眞備、空海の、集めて大成せるものなる可し。然り、之れを五十音圖に纒め之れをいろは四十八字の今樣歌に槪括せるものは、二人者を待たざる可からざりしなる可く、幸に、二人者は、長く支那に留學して、其の音韻學を修めたるよりして我國民的文化の進歩に、至大の關係ある、五十音圖及いろは歌を、作製するを得たるなる可し。

想ふに、假名の發明あり、片假名、平假名の五十音圖及いろは歌に統一せられてより、國民文學は、長足の進歩を爲すに至れるは、推知するに難からず。然り、

余は、假名の發明なかりせば、國民文學の發達は、非常に長く、阻害せられたるならんと思ふなり。和歌は、神代より早く已に、純然たる國民文學たり。されど、和歌を幾萬首集めたりとて、源氏物語、枕草紙の大作は發生せざるなり。此等の大作出でずんば、和歌如何に盛んなればとて、我國民文學は、餘りに貧弱の感なからずや。余は源氏、枕の出でゝ、始めて國民文學の確立せるを信ずるものなり。而て源氏、枕の出づるに與て大因を爲せるものは、假名の發明流行したることなり。此便利なるものなくんば到底、此等純粹なる國民文學の大作は、出づる能はざりしなる可し。

然り、余も決して假名の流行が、直ちに、源氏、枕の二大作を、產めりと云ふには非ず。他に種々の原因の、存す可きは云ふまでもなし。想ふに、漢學、佛敎の渡來は、我國の文化の進步に、非常なる刺戟を與へたるは勿論なるが、奈良朝迄は、云はゞ直譯時代にして、未だ、國民的に消化すること能はざりしものゝ如し。然るに、平安朝に至り、偉人頻りに輩出して、之れを消化し、同化し、其結果は、折衷調和の妙を極むるに至りて遂に、絢爛なる平安朝文化を釀成するに至れり。今日に遺れる美術品を比較するも、奈良時代前後のものは、支那の直譯だけありて、何處となく、大陸的壯大さの認めらるゝが、平安時代の進むに從ひ、支那の壯大さは次第に減じて、優美、典麗の趣多くなりもて行けり。此は和歌などの如き、純粹の國民文學にすら、明瞭に現はれ居ることは、奈良時代を代表する萬葉集と、平安時代を代表する古今和歌集とを、比較すれば明かなり。

然り、山紫文明の影響か、四時の變化、デリケートなるの感化か、黑潮の近海を流ゝ爲め、水蒸氣の甚だ多き影響か、其原因の那邊にあるやは別として、我大和民族の一大特性の、多感多情にして、優美、典麗なることは、爭ふ可からざるものなり。それが奈良朝前後、支那、印度思想を直輸し、直譯せる際には未だ、國民性を發揮するに暇あらざりしも、此等の輸入漸く年久しきに至て、國民の思想、文化の

内容、次第に豊富となるに及んで……特に平安時代、唐朝との直接交渉、殆んど絶ゆるに及んで、漸く國民性の特色を發揚するに至れるもの、是れ實に、平安文化の絢爛を致せる大因ならずんばあらず。尚、こゝに一の注意す可きは、他國の文學に習熟するの、如何に困難なるかと云ふことなり。漢學の渡來してより、唯一の官學として、奬勵至らざるなく、漢學の素養なきは、男子に非ずと云ふの勢を以てしたるに拘はらず、漢文漢詩に熟達せるものは、極めて少數にして、其少數非凡の人々の作物すら、今日より之れを見れば、技巧の長所は見られざるに非ざるも、眞の漢文漢詩の妙味は無く、形式は漢詩文の態裁を具ふるも、諷誦の妙味は到底、支那の原作に及ばざること遠し。否、啻に平安朝時代のものゝみならず、漢文の眞に、支那の原作と、伯仲せるに至りしは、遠く去て德川時代に下り、物徂來を待たざる可からざりしと云ふ。特に漢詩に至りては、德川時代の末より、明治にかけて、漸く眞の漢詩を出せりと云ふ。

之れに反して和歌、國文は平安朝時代已に、後世、其追隨をゆるさゞるの域に達せるものあり。官學として奬勵せられ、有髯男子が、畢生の心血を絞りたる漢文漢詩の、彼の如き貧弱なるに終りしに拘はらず、國民固有の文學は、假名を得て、此の如き進展をなせるもの、誠に以て外國文學の其まゝの模倣の如何に困難なるかを推知するに足る。男子の如く、堂々と、正式に學問するの權利と便宜を有せざりし深窓の女子の手に、源氏物語、枕草紙の如き大作の、後世長く光輝を放つものあるに比して、其足下にも及ばざる、當時の男子の漢詩文の作物を見て、吾人は、實に多大の感慨なきを得ず。

源氏物語は、平安朝爛熟期の、大内山の春の日長の、夢物語と見る可きものなるが、一種の寫實小說たるは、爭ふ可からざるものにして、固より、光源氏の君や、紫の上は、現實のモデルは無かりしにもせよ、此等の主人公と、類似のタイプを有したるものは、多々現存したる可ければ、其れが紫式部の、秀靈の頭腦にレフア

インせられ、稀れに見る才筆に依て、極彩色の繪卷物の如く、寫實風に畫かれたる現の物語たるものから、吾人は、之れに依て、平安時代の紳縉貴女の、眞面目を想察して、誤りなかる可し。西洋の寫實小說がモツバサン等の力に依て、第十九世紀に、漸く現はれしに比し、之れより約一千年の昔に、我れには已に、源氏物語を有したることは、豈、一大誇ならずや。

枕草紙は、清少納言と云ふ、式部よりも一層、才氣迸發の婦人の手に、成りしものにして、觀察の奇警、機敏は其最大特色なるが、中には、小兒に對する觀察もありて、甚だ面白し。「ウツクシキモノ」の段に、

三ツバカリナル兒ノ、急ギテ這ヒ來ル道ニ、イト小サキ塵ナドノ有リケルヲ、目ザトニ見ツケテ、イトオカシゲナル指ニ捕ヘテ、成人ナドニ見セタル、イト美シ。

アマニソギタル(首筋にかゝる程に切り揃へたるオカツパ)兒ノ、目ニ髮ノ被ヒタルヲ、搔キハヤラデ、打チ傾キテ、物ナド見ル、イト美シ。

ヲカシゲナル兒ノ、アカラサマニ(ちよつと)抱キテ、愛シム程ニ、カイツキテ、寢入リタルモ、ラウタシ。

八ツ九ツ十バカリナル男ノ子ノ、聲ヲササナゲニテ、文讀ミタル、イト美シ。

漢學と共に、佛敎の、平安朝に至りて、大に國民化せるも、注意す可きなり。日本天臺宗の開祖、傳敎大師最澄、眞言宗の開祖、弘法大師空海と云ふ二大偉人の、日本佛敎界に現はれしことは、平安時代の佛敎の隆盛に、大なる關係を及ぼせるや、言を待たず。最澄は、唐に渡りて、其天臺山に、佛敎の蘊奧を極めたる、智識第一の高僧にして、歸朝後、比叡山に、阿耨多羅三藐三菩提を修して、長く王城の鎭護となりしのみならず、後世永く、德川時代に至る迄、智識第一の人物は、常に此山に出るを常とするに至らしめしもの、如何に彼の感化の大なりしかを、想察するに足る。此は本來、天臺宗は、佛敎中、智宗に屬するにも因る。眞宗の開祖、親鸞も法華宗の開祖、日蓮も共に、其智的修養は、叡山に於てせるなり。

空海は、最澄と性格を異にし、眞言宗秘義に民衆をチヤームするの力、頗る偉大なるものあり。其れを善用して、日本到る處に民衆の力を合せて、寺を建て、堂を造り、山を開き、池を堀り、橋なきに橋を架し、道なきに道を開き、或は農事開墾の方法を授け、或は水利土功の術を授く。宗教の弘布と共に、民衆の生活改善、經濟指導、至らざるなく、いろは歌を介して、地方人にまで、幾分の文字、文學を教へしことも、多かる可く、書畫、彫刻に、國寳を遺せる多きも勿論なり。我國古來、偉人の輩出少しとせざるも、恐らく、空海の如く、博學多才にして、しかも、感化の絶大なるものは、他に全く之れを見ずと云ふも、過言に非ざる可し。

さて、傳教、空海等に依て、日本化されたる佛教思想は、漢學の思想と共に、弘く國民の腦中に、浸潤したるや察す可く、其之れありしが爲めに、源氏、枕草紙等の大文學も、醞釀せられたるや必せり。要言すれば漢學、佛教の思想が、國民特に平安朝の有閑階級に、深く融化せられたる時、恰も假名の完成せるありて、表明の頗る容易となりし爲め、源氏、枕を始め幾多の平安文學、鬱然として興起せるなり。

因に云ふ、前に己に述べたる如く、漢學と共に、書道の紳縉に重んぜられしなるが、假名の完成してよりは、是れもまた練習するに至りしは、歌など書き送る際、甚だ必要なることより、推して察す可し。特に、假名を女文字と云へる程なれば、婦人の假名文字の練習に、力を注ぎしは、當然のことなり。當時は習字としては先づ、假名を一字づゝ放ち書きを練習し、次で續け書きを習ひ、漢字を習ふ順序、後世と同じ。源氏の君は、十歳ばかりの頃の紫の上を垣間見て、貰ひ受けたしと、其祖母へ依頼せる返事に、「まだ、難波津をだに、はかばかしう續け侍らざんめれば、かひなくなむ。」とあり。難波津とは、王仁の歌と傳へられたる、「難波津に咲くやこの花冬ごもり今を春べと咲くやこの花」のことなり。依て源氏の君は、「かの御放ち書なむ、なほ見給へまほしき」と再び書き送れり。放ち書にはいろは歌と、「あめつちの詞」とが、手本となされたり。「あめつち詞」とは

あめ　つち　ほし　そら　やま　かは　みね　たに　くも　きり　むろ　こけ
ひと　いぬ　うへ　すゑ　ゆわ（硫黄）　さる　おふせよ（育せよ）　えの江を（榎
の枝を）なれゐて（馴れ居て）

を云ふ。又續け書の手本には、難波津と、淺香山の歌など、用ひられたり。淺香山は「淺香山かげさへ見ゆる山の井の淺き心をわが思はなくに」と云ふ歌なり。さて續け書の練習熟すれば、古今集などの歌を自由に書く。和漢朗詠集なども、多く用ひしが如し。無論漢字の方は、進みたる者は、王羲之を敬慕したるは、前に云ふ如し。當時、羲之をテシ（手師）と云ひ、殆んど書道の神と尊びたり。假名は我國特有のものなれば、藤原行成など、長く憧憬の的となる。

概觀すれば、平安爛熟期の文化は、外的刺戟乏しき上に、生産經濟には直接關係なき、有閑階級の間に、醞釀せられたるものなれば、優艶巧緻の長あるも、男性的の剛健味は、殆んど之れを見ず。今日の言葉を以て云へば、軟文學的のものたるは、

爭ふ可からず。想ふに、大内山の春の日長を、花の夢に耽り、秋の夜長を、戀愛三昧に明け暮れせし、大宮人の中に、咲きし文化の、軟文學的なるは、當然のことなる可く、加ふるに、佛教の、現世を汐沫夢幻視するの思想、感情は、徒らに、物の哀はれをのみそゝりたるなる可く、其處に、剛健の氣象の、養はる可くもなく十二三歳にして、早くも戀を知り、性的遊戯に精力を絞るの結果は、二十歳を越せば、哀れにも青春の光失せなんとし、三十歳前後の短命に終るもの多く、不惑、知命迄生きたるものは、稀れなりき。

第二章　鎌倉、足利時代

第一節　鎌倉時代

實力を伴はざる、大内山の夢の如き現の生活が、永續す可くもなく、都の内外の、山法師の團体をすら、制御する力なし。況んや、地方に勃興せる、武門武士の勢力をや。されど白河法皇を唱首とせる所謂、院政時代の頃は、實力を有する武門武士も、因襲制度に支配せられて、空位空官の形式的榮譽に釣られて、月卿雲客の手足となりて滿足し、血統に絶大の尊敬を拂ひたる地方民は、清和源氏や伊勢平氏の子孫の、地方に來るあれば、喜び迎へて、其愛孃を枕席に侍せしめて、之れを無上の光榮とし、地方の豪族は、都の貴族生活を憬れて、其形式を己が鄕土に移して、誇となす。奥州の藤原家が、平泉に京都を模寫したる遺蹟は、今日もなほ國寶の珍なるものとして、保存せらる。されど、保元、平治の戰亂、都の眞只中に起りて、平素、衣冠束帶に、威儀を正したる公卿百官の、乘馬にさへ堪えず、矢叫びの聲に唯戰慄せるのみなる、無力無爲のものたる、現實曝露しては、最早、武門武士の、其の指呼に甘んずる筈なく、平治の戰に臨んで、源爲朝を俄に、藏人に任ぜんとしたるを、爲朝嘲笑して受けざりしが如きは、極端なる例なる可きも、官位官職の、傳統威力を失へるを證するには、十分なり。當時、武門武士の諸國に散在せるもの、固より多々ありしも、源平二氏は、其最なるものなりしが、中にも、平氏は其祖忠盛夙に、昇殿を許されたる例もあり、都の風俗に、慣れ居ること、源氏以上なりしかば、平治の戰に好機を握りて先づ、天下は平氏のものとなりぬ。然かも幾許もなく、弓矢取る手に、糸竹を弄し、三軍を叱咤す可き口に、朗詠を吟じて、其滅亡を急ぎ、遂に哀れを西海の波にとゞめて、源氏の爲めに、取つて代られたり。

支那の東夷、西戎、南蠻、北狄も一たび志を得て、中原の文化に接するや、忽ち

軟化してまた、昔日の武力なく、忽ちにして興亡盛衰するを常とす。我京都の文化は、洛陽、長安の大と、比較す可くもあらざれど、忽ちにして平氏を軟化し、忽ちにして狒猴に冠せる木强漢、木曾義仲を軟化せり。さすがに、源頼朝は、武人中の一偉人なり。之れを看破して、事成るも、覇を鎌倉に開きて、京師を、王城の昔のまゝに委せり。源氏を斃して取て代りし北條氏も、能く頼朝の遺志を守り、天下の實權を、鎌倉に握りたるが、足利氏は京師に居を定めたる爲め、また忽ちにして軟化したり。然り、たとへ、尊氏より義昭迄、代を重ぬること十五なりとは云へ、其は有名無實にして、三代義滿の時、僅に京師附近に、其威嚴を誇りたるのみにして他は名は將軍と云ふと雖も、實は京師の守護職にも過ぎずして、地方に於ける聲望は到底、源氏、北條と比較にならず。戰國割據の準備は、京師に足利將軍の有るには、何等の頓着なく、日夜進展しつゝあり。後、德川家康の天下取りとなるや、慧眼能く頼朝の故智に倣ひ、京都を單に、榮譽の府とし、己れは鎌倉に近き、江戸に鞏固の根を下したり。

槿花一朝にして亡びたる、平家の都落ちの跡は、アサヂガ原と化して、月の光りも悽愴を極めたれば、文教の衰微したるは、當然のことなる可きが然し、廣く日本全國を見渡せば、文教は寧ろ次第に廣く、天下に弘布したるなる可し。鎌倉、平泉などは云ふも更なり、其他の地方にも、小規模ながら、京師の文化の移植せられたるや必せり。此は前に述べたる、假名の普及と、佛教の國民化とに依りて、大に助長せられしなる可し。特に佛教は、平安の末より、次第に所謂、難行道より、易行道に移れり。融通念佛宗、淨土宗、淨土眞宗の如きは、之れを華嚴、天臺の高尚なるに比すれば、入り易く、信じ易く、無智文盲なる田夫野人にも、体得せられしは云ふ迄もなし。かくして、公卿に代りたる、當時の智識階級、僧侶によりて、一般民衆も、其説教、講話に、次第に無自覺の夢より覺めて、多少の文教を消化するに至り、たとへ、其質に於ては、平安朝のそれに劣る所あらんも、量に於ては、遙かに

多數者の間に、文教の光りの輝きそめしは當然なり。今昔物語、平家物語、源平盛衰記などは未だ、刊行書として、廣く國民一般の手に、渡らざりしなる可きも、或は講談師により、或は琵琶法師により、何時とはなしに、地方民衆教育に、資せられしなる可し。

こゝに、源頼朝の、我文教上に遺せる、一大功績は、武士道の權輿となりしことなり。忠君愛國は、太古以來、國民の特性たるは云ふ迄もなし。されど其れが所謂武士道なる一種獨特の道德を形成せるは、一時的の主從關係が、經濟上の事情と、情誼の結合性とにより、累世的家の子、郎黨關係となり、外面的烏合の集團より、內面的、情意的の結束となりたるに由る。彼の前九、後三の役に、源頼義、義家父子が、奥州の安倍氏と對陣して、櫛風沐雨、艱難多年にして、主從間に、解くに解かれぬ情誼關係の醞釀せられし頃より、武士道の曙光は、輝き初めしものか。されば武士道は、初めは主として武士の主從間に成立せるものにして、太古以來の天皇に對する忠君愛國とは、相異なるものありしことを、記憶せざる可からず。

さて、頼朝は、覇府を鎌倉に開くや、大に武士道を奬勵し、弓矢取る身の、武藝の激勵せられしは云ふに及ばず、積極的には、清廉潔白を勵まし、消極的には、卑法未練を戒しめ、士氣大に揚る。されど、當時の武士道なるものは未だ、後世德川時代の如く、洗練せられたるものには非ず。其家の子郎黨が、一朝有事の場合、君公の馬前に、身命を顧みずして働くは、平素衣食經濟の利益を與へられたる、恩賞に報ゆる所以なり。

頼朝の奬勵せる武士道は、北條泰時、時頼に至て、一時完成を告げたり。此は泰時、時頼其人が、清廉潔白、質素堅實の權化とも云ふ可き、人格の持主なりしことが、大に功果を大にしたるなる可し。されど、余想ふに、日本の武士道が殆んど、理想の域に達せるもの、禪宗與て最も功あり。固より、弓矢の道に丹念し、家名を重んじ、祖先の名を辱しめざらんとし、義を泰山の重きに比し、身命を鴻毛の輕き

に比するの風は、泰時、時頼の時代早くも、完成せるが其は未だ、深き精神鍛錬の結果にはあらざりき。「命をば相模殿に献り、恩賞をば子孫の榮花に貽さん」とは、當時の武士の心境なりき。此經濟的利得觀念を超越して、武士道を、眞に理想的のものと化するものは、禪宗なり。

頼朝の士道を奬勵せる、鎌倉時代に至りて、支那より、禪宗新に渡來せり。從來の天臺や、眞言や、一は餘りに智識的、論理的なり、一は餘りに祕法的、象徴的なり。共に死生の巷に出入する、武士の氣風には合ひがたし。然るに、禪宗は、意志鍛錬宗なり。論理的に悟入するに非ずして、直覺的に悟入するなり。其直指人心、見性成佛、不立文字、教外別傳の特色は、文字の素養少く、事上鍛錬に、体驗を積みたる、武士に對する教法としては、其潑溂たる氣分に於ても、誠に恰好なるものなりき。教義已に然り、手段もまた辛辣にして頗る武斷的なり。彼等の一棒一唱は與奪自在、殺活自由、眞に痛快なるものなり。是れ豈、武士が死生の間に出入して、膽力を錬るに最も適切なる宗教ならずや。こゝに於てか榮西、道元などの禪僧は、大に鎌倉武士の間に尊重せられ、從來單に外形的武藝に依てのみ鍛錬せられたる武士は、今や根本的精神的に、鍛錬せらるゝに至れり。されば、鎌倉以來の有名なる武將中には、禪風を嗜んで、端的に、生死の一大事を悟了したるもの少なからず。中にも北條時頼は、造詣甚だ深かりき。時頼大に道元禪士の德風を欽仰し、使を永平寺に派して、關東の化導を請ふ。道元鎌倉に下る。時頼自邸に館して厚遇す。「春流高似〻岸。細草碧〻於〻苔。小院無人到。風來門自開」とは、時頼當時の偶作なりと云ふ。深く禪機に觸るゝが如し。弘長三年、彼れの卒するや、袈裟を着け繩床に上り、坐禪して動搖の氣なし。頌に曰く「葉鏡高懸三十七年。一槌打碎大道坦然」其最明寺入道として、諸國行脚の數々のエピソートは、悉くは信ず可からずと雖も、深く禪風に私淑して、自家驕慢の影失せて、偏に、救世濟民の德風を遠近に仰望せられたるは疑なし。時宗も亦、參禪して深く体得する所あり。祖元禪師を

元より迎へ、巨禪寺に入れて參禪日に怠りなし。弘安四年春正月、祖元、時宗に書き示して曰く「煩惱する勿れ」と。時宗曰く何事ぞと。祖元曰く「春秋の間にならば、博多のあたり騷動す可し。されど、一の風わづかに起りて、萬の艦を散々に吹き拂はんずるぞ。願くは公、必ず、此事を心にかけて、思慮する勿れ」と。已にして果して、元軍襲來す。時宗、武裝して祖元に見えて曰く「大事到來せり」と。禪師曰く「如何か向前せん」時宗身を躍らして大喝一聲す。禪師曰く「眞の獅子兒なり。能く獅子吼す驀進して回顧すること勿れ」と。時宗拜謝して出づ。吾人は、時賴に於て、鎌倉武士の平時の面目を見、時宗に於て、鎌倉武士の事變に處する、好標本を窺ひ得るに非ずや。二人者を以て、清盛、義朝などと比すれば、同じく武士と云ふとも其間修養上の大差あるを見ん。

南北朝時代の大立物楠正成、後醍醐帝の爲めに辛酸を嘗めし、藤原藤房、戰國時代に入りては北條氏政、大內義隆など、何れも深く禪機を握れり。太田道灌に至ては、實に花も實もある武士の典型たり。信玄、謙信また共に禪の修養篤く、伊達政宗、蒲生氏鄕二人も、其僻世を見て、精神鍛錬の凡ならざる明かなり。德川時代に至ては、家康時代には、僧天海大に用ひられ、家光時代には、澤庵和尙尊信せらる。白隱禪師に至りて、我國の禪道は、精妙の極に達す。彼れは五代將軍綱吉より、十代將軍家治の時迄、生きたる人物にして、著作甚だ多く、其中、夜船閑話、辻談義、主心お婆々粉引歌、安心ホコリタ、キ、サシ藻草、オタフク女郎粉引歌の如きは、高妙なる禪味を、平易に說き來り、出沒自在、應用究まりなし。

禪宗は又、武士道に關係多き、宋學の輸入に對して、大に力あり。彼の道隆、一山の如きは、禪と共に、宋學を輸入せり。殊に北條貞時の最も尊信したる、寧一山の如き、我國宋學の元祖として傳へらる。要するに、武士道の精錬には、禪宗最も與て力多く、宋學之れを助けたり。

されど、禪的修養を積みしは、武將階級に過ぎざる可く、當時一般の武士として

は、弓矢の道を第一とし、閑を以て手習、和歌、連歌を稽古する位のものなりき。而て教育の場所としては、武士も平民も皆等しく、寺院に於てせり。卽ち寺院は、當時唯一の學問所なりしなり。德川時代に至て、浪人武士などの開ける私塾までも寺子屋と云へるは、其由來こゝにある可し。又當時習字などの教科書と云ふ可きものは、實用文字を集めたるもの又は、往來物なりき。往來物の最も古きは、藤原道長時代の、文章博士藤原明衡の名による、明衡往來なり。其後釋氏往來（中心忠親の著）十二月往來など出でたり。童子教、實語教なども用ひられしが如し。

當時、教育機關として、見る可きもの二あり、一は足利學校にして、下野の足利にあり。學校とは云ふものゝ、師弟相教授せるものにはあらで、今日の圖書館に等し。創立者など不明なるも、不思議に長く存續して、地方文教に便せり。一は金澤文庫にして、武藏金澤稱命寺境内にあり。始めは、北條氏の私文庫なりしが、北條氏亡びてよりは、寺有となりて是れ亦、珍しく存續して、兵馬惚控の間に、文教上一縷の命脉を維持せり。

當時の女子教育は、習字、和歌、琴など舊に同じく、時に國史を學ぶものもありしと云ふ。手藝として、花結廣く喜ばれ、裁縫は實用するものゝ範圍に止まれり。此時代の女子は、後世、德川時代程には卑まれず、北條政子の如く、女子にて政治上の活躍を爲せるものは別とするも、社會的の地位、必ずしも低からず。實力本位の時代なりしが故なる可きか。

第二節　足利時代

想ふに、源平二氏以來、權力下移の氣運、次第にテンポを早め、源平は兎も角何れも、皇族より出でゝ、武門に入りしものなるが、北條氏に至ては、所謂倍臣の身を以て、事實上覇者の事を行ふ。北條氏に取て代りたる足利尊氏は、其門地より云へば、北條氏よりも一層下位にあり。足利以後、世は戰國時代となり、實力の競爭

益露骨となり、京都の衰微目もあてられず、昔時の月郷雲客の子孫は、日常の衣食にすら窮するに至り、多少の文筆あるものは、地方の武門に雇はれて、僅に生活の資を得る、憫れむ可き實狀を呈せり。一方實力あるものは、其素性の如何を論ぜず或は智巧に依り、或は武略に依り、忽ちにして一城一國の主と仰がる。豊臣秀吉、一百姓の小忰と生れて、天下關白となるに至て、權力下移の趨勢、其極に達す。

當時は所謂、下剋上の實力競爭なりしかば、一般人の道德も、主我的、利己的となり、鎌倉より北條時代に、養ひ來りし武士道なるものも、事實上、一部の人々を除きては、頗る衰頽せるものゝ如し。武士は皆、恩賞を競ふて、其主を選び、廉耻の精神は乏しくなり、之れが爲め、高潔の士も、政治に望を絶ち、個人主義、獨善主義となり、一休の如く世の中を茶化して、面白可笑しく渡り、兼好の如く、皮肉を連發して、僅に鬱を散ずるもの多し。此等は智識階級の人々なるが、一般無智の徒は幸に、當時盛んなりし易行道の宗教に安心を求めたれば、宗教の盛んなること前古比なく且つ、迷信の多くなりしも此時なり。社會百般の事、佛教的色彩を帶びざるなく、其狀恰も、西洋中世時代の如し。歌聖柿本人麿の作と稱せらるゝ「ほの〳〵と明石の浦の朝霧に島がくれ行く船をしぞ思ふ」の歌を、全然佛教に附會して解釋せるものあり。小町草紙には「明石の浦とは、衆生の迷ひの心なり、島がくれ行くとは、三界流轉の心なり、船をしぞ思ふとは、大慈大悲の憐れみ給ふ心なり」と云へり。又源氏物語は、鎌倉時代より、我國古典の最大權威として、敬重せらるゝに至りしが、其五十四帖は、天臺宗の根本所據たる、三大部六十卷に、象徴せるものと云はれたり。かゝる牽强附會の流行は、如何に佛教の當時の人心を强く支配せるかを、推想せしむるものなり。

鎌倉時代には、平家物語、源平盛衰記の如き大文學の創作もありしが、足利時代となりては、僅に太平記、增鏡あるのみにして、雄篇大作出でず。謠曲は足利時代唯一の文學的產物と見る可きものなるが殆んど、佛教趣味の思想、怪奇の盛られた

るのみ。又文教の停滯せる時代の常として、祕事口傳に重きを置き、極めて些末の事も、祕密に附し、師傳に勿体づくる風盛んとなれり。古今傳授などは其最たるものなり。

日本文化の中心地たる京師すら、幾度の兵火に燒野ヶ原多く、學問など、優長にするものなかりしことは、江村尊齋の老人雜話に、「老人少年の時、洛中に四書の素讀教る人無し。公家の中に山科殿知れりとて、三部を習ひ孟子に至りて、本を人に貸し置たりとて、終に教へず、實は知らざるなり」とあり。誠に言語同斷と云ふの外なし。尤、老人の少年の頃と云へば所謂、元龜天正の頃にて、戰國の亂離其極に達し、織田信長現はれて、天下一統の曙光、輝き初めし時代なり。

されど、武士の教育に、文武両道を重んずるに至りしも、足利の時代なり。等持院殿御遺書に「文武兩道は、車輪の如し。一輪かくれば人を度さず。然れども戰場に文者は功なき者なり。こゝを以て、文は治の元にて、太平に用ひ、武は亂國に用ゆと云ふ事を知る可し。殊に國を治むる人は、文に携はり、小身にして五兵に携はる者は、文學は無益なる可し。」と云へり。當時の文武兩道は尙、武を主とせるものなるは、戰爭多き時代としては、當然のことなる可きも所謂、昔の猪武者より見れば、文の修養の次第に重んぜらるゝに至りしこと、文教衰へて文教却て、天下に弘まりし結果と見る可きか。固より、當時は必要上、武藝の大に發達せるは云ふ迄もなく、其武藝の種類は大に變遷せり。源平より鎌倉時代へかけては、馬術と弓矢とは、最も重んぜられたるが、足利の初め頃より、戰法變じて、接戰多くなりしかば劍術次第に發達し、南北朝の頃よりは、槍を戰場に振ふものも多くなれり。想ふに戰爭の度重なり、戰士の氣分も急迫し、最早往時の如く、遠く隔てゝ弓、矢の腕試しに、時間を多く費すの優長振りを、容さゞるに至りしものならんか。塚原卜傳などの名家出るに及んで、流派を立てゝ武藝を教ゆるものも、漸く多し。天文十二年に、始めて、鐵砲の種子島に傳へらるゝや、此新式の武器は、忽ち全國に廣まれり。

こゝに戰法は、一大變遷を來たし、最早、昔の如き一騎打のドラマチックの戰爭など、滅多になくなり、隊伍を整へて、掛け引の術に、智巧を錬るに至れり。

戰國亂離の世にも、さすがに京及鎌倉の五山は、學問の中心として、佛敎と共に漢學を維持し、志あるの武士、紳縉は、こゝに就て學びたり。又一時衰へたりし、足利學校及金澤文庫は、共に篤志家上杉憲實の手によりて再興せられたるが、金澤文庫の歷史、多く傳はらず。足利學校は、中興以後、世々禪僧校主となり特に、第七世の校主九華和尙の如きは、戰國亂離の世に當りしにも拘はらず、在任三十年、敎を受くるもの三千人の多きに達し、周易の講義一百日の會を起すこと、十六回なりきと云ふ。想ふに、東國の僻陬にありしため却て、中央の戰禍に遠かり、比較的靜閑を得たるには非ざるか。勿論、此學校に學ぶ者の多くは、僧侶なりしも、彼の平安朝に比すれば、室町時代は、平民擡頭の世なりしかば、庶民の字を習ひ、歌を作るものは次第に多く、中には、足利學校などに、漢學を修め、佛敎の講義を聞くものもありしなる可し。實權下移は獨り、武力に依るものゝみならざる可し。當時の狂言、お伽草子などを見れば、庶民の智識的修養の、昔日に比して、一般に進展せる迹、歷然たり。又一般人民の、武士などに雜りて、寺院に學ぶものゝ數も、次第に多くなれり。五山の僧侶の詩には、チゴ即ち僧侶ならぬ俗弟子の敎育を爲す寺を、學校と見なして已に、村校と云ふ語を用ふるものあり。幻雲詩藁第二に、村校新凉と題し、「去歲入京初學ㇾ書。炎塵撲ㇾ面掃難ㇾ除。秋來憶見鄕村校。麻骨燒殘凉雨餘。」の絕句あり。此村校と云ふもの、到る處に存して、武士庶民の敎育普及に、功多かりしことゝ想像せらる。無論、其學ぶ所の內容は、實用的の手習ひが主たりしなる可きも、漢文、國語の古典を學修せるものも、之れありしことは、毛利家の臣、玉木吉保の自叙傳「身自鏡」などを見れば明かなり。節用集、下學集など簡易なる字引の編纂せられて、庶民に便利を與へたるも、足利中期頃よりなり。又以前の往來物は、消息的の書簡文の手本に、限られたるやうなるが、此時代に至りて、敎

訓的内容を有する、往來物現はれたり。叡山の實嚴僧正の著はせる、山密往來は其一例なり。中には二十八通の手紙あり。序文に「擬二涯分有職之幼學一之計也」とある に依て、内容を察す可し。次で、著者は明かならぬも、内容の前者に似たる、庭訓往來なるもの出でたり。此は武人向きのものなるも、後には一般人の手習本ともなれり。遊學往來、新撰類聚往來なども、内容は異なるも、同一タイプのものなり。又鎌倉時代の消息型のものとしては、一條兼良の尺素往來最も有名なり。かくて、往來物に、書簡文專門のものと、常識讀本的のものと、二種生じたる次第にて、書簡文体のものとしては、應永十年頃に、主として鎌倉末期の手紙を集めたる「十二月消息」あり。新編としては、文明十八年書寫の奥書ある「消息往來」あり。次に常識的のものとしては「應仁亂消息」、「喫茶往來」(茶道に屬す)、「蒙求臂鷹往來」(鷹狩に屬す)、「會席往來」(連歌に屬す)など、續々現はれたり。多くは、僧侶の作なるは、云ふ迄もなし。右の外、貞永式目も、教科用としては多く用ひられたり。

以上は皆、學問するものゝ範圍の廣くなりしことを、直接間接に證明するものなるが、之れと同時に、後世所謂、童話なるものも、此時代より漸く盛んになりしものゝ如し。無論童話の語は、德川時代に至て、始めて用ひられたるものなるも、童話と稱す可き種類の書は、昔より存したり。竹取物語、今昔物語などは、其著名なるものと云ふ可し。されど、今日迄も、兒童に愛せらるゝものは概ね、室町時代より、戰國時代にかけて、出來たるものゝ如し。浦島太郎、羽衣、瘤取、腰折雀(後の舌切雀)など是れなり。南北朝以前のものは、多く神話に結びつけられ或は、傳說集の中に採錄せられたるが、以後は、一篇の短篇小說風に取扱はれ、お伽草子の總稱を有することゝなりぬ。無論お伽草子の中には、大人の讀み物も少なからず。其中童話と目す可きものゝ、當時に出來て後世迄も愛せらるゝものは、一寸法師、酒呑童子、浦島太郎、中將姫などなり。桃太郎、猿蟹合戰、舌切雀、花咲爺、カチ〳〵山などは德川時代の作物なり。

女子の社會的地位は、室町時代に至りて、卑くなれり。從來之れを以て、佛教の弘布して、女子五障説の行き渡れること、儒教の七去三從の教の徹底せる爲めと云はるゝも、然し儒佛の教は却て、平安時代に盛んなりし次第なれば、若し之れが直接原因ならば、室町時代を待たずして、女子の地位卑くなる可きに非ずや。其然らざるものは、他に原因ありてなる可し。余は前に奈良、平安朝の時代は、夫婦同居するもの少く、事實上母系制度なりしが爲め、女子の權力强かりしと云へり。而て夫が妻の家に通ふの制度は、鎌倉以後次第に變遷し、女子は多く男子の家に嫁ぐの風となり行き、此風の完成せるは實に、室町時代なり。こゝに母系制度倒れて、父系制度となり、女子は男子に養はるゝものとなり、經濟上の獨立なきものとなりて女子の社會的地位は低下せるなり。戰國時代に至りては、武力全盛時代のことゝて武力無き女子の、男子に壓迫さるゝは當然のことにて、諸侯の間に、政略結婚も多くなり、女子は外交手段に利用さるゝに至てまた、昔日の面影なし。こゝに至て、七去三從の教は、便宜上より利用せられ、因襲の久しき遂に、牢固として拔く可からざる、男尊女卑の習俗となり了んぬ。

第三章　德川時代

第一節　概觀

我國の歷史は、安土桃山時代より、江戸時代に至りて、其面目を改めて、著しく近代的色彩濃厚となれり。實に、江戸三百年の平和は、殆んど、外國の刺戟を避けて、桃源夢裏に、國民の自發的文化の進展を、ほしいまゝにせしめたり。眞に、我國特有の文化と稱す可きものは、江戸時代に醞釀せられたるなり。而て、此國民的特有の文化の創造者は從來の京師の縉紳にも非ず、天下の權力を掌握せる武士にも

非ずして實に、從來最も無力なるものとせられたる平民なりき。

然り、德川時代は、士農工商の階級制度極めて、嚴に、表面上より云へば、農工商の平民階級は、人格を認められざりしものゝ如きもしかも、三百年の平和は、社會をして大に餘裕あり、寛宏あるものたらしめ、其處に名もなき平民の、自由創造の天地も展開せられたるなり。江戸時代以前は、國民の理想は、京師の貴族的生活の模倣にして、苟も志を得て經濟力の豊かとなれるものは、貴族たると武士たるとさては、地方の豪族たるとを問はず、其理想とする所は同一なりき。然るに江戸時代に至りては、最早、昔日の理想を追隨せんとは爲さゞりき。當時武士のみ支配階級に立ちしも、其は表面上の生活、政治上に於てのことにして、農工商產業は勿論藝術、文學、風俗、流行の創造發展は、全く平民の手に委せられたり。武士は、戰場に於てこそ優者なるが、太平の世に於ては、其唯一の武力は、用ふるに所なく所謂、寶の持腐りの有樣なりしかば、歷代の將軍、諸國の大名は常に、武道の奬勵を怠らざりしに拘はらず、各種の武術は、多く形式化し行きたり。のみならず生中、武士と云ふ窮屈の家に生れたれば、そして代々家職を世襲して、生存競爭に刺戟せられざりしかば、實力競爭の激烈さは、今は武士よりも平民の仲間に多く、其結果は武士階級は硬化停滯して却て、平民階級に、潑溂たる進展を見るに至れるなり。

德川家康は、日本人には稀れに見る、忍耐力の强き人物にして、其頭腦も、中々に徵密なりき。豐臣氏の天下を奪つて、彌自己活躍の舞臺となるや、大体、封建制度を採用せるも、封建の弊たる、中央政府の權力衰弱に備ふるの策、到れり盡せり。則ち、諸大名中の外樣の强豪のものゝ間には、必ずまた、强大なる親藩を配置して之れを制せしめ、大名中最大藩たる、加賀の前田氏すら、公稱百萬石、事實六七十萬石を領するに過ぎざるに、己れ德川一家は、公稱八百萬石、事實一千萬石を領して、經濟上の實力も、超優位を占めたり。又三都制度に於ても、權力の偏重を慮り、江戸を武力の府とし、京師を榮譽の府、浪花を商賣の本元とせり。武力の府は

天下支配の實權を有する、德川氏の宗主すら征夷大將軍の名に甘んじたれば、其幕下の榮位の低きは、云ふ迄もなし。榮譽の府の京師は、公卿百官何れも、高位に居り、德川氏の宗主に比す可き程のものは、屈指にいとまあらず。而かも其の實權は儀式典禮の形式を守るの外、天下の政治に何等の關係なく且、經濟向は甚だ貧弱にして上、皇室の供御より、公卿百官の生活費を合せて、十萬石の中大名に過ぎざりしと云ふ。表面、麿殿と尊敬せらるゝの人も、內實は扇面の繪など書きて、小遣錢を儲けざる可からざりきと云ふ。大阪は之れに反し、所謂天下の町人にして、武力なく、榮位も煎じて飲む程もなく、此點、江戸、京師と比較にならぬが然し、金力經濟の餘裕は、綽々たるものにて、同じ町人にても、江戸の如く、武士の壓迫なく京師の如く、公卿の空ら威しなければ、大阪の町人は、町人同志の競爭こそ激烈なれ、各種文化は、自由に創造せらるゝの便、最も多かりき。之れを學問に見るも、江戸には、官學として朱子學最も盛んに、大學の頭など嚴めしき學者を初めとし、所謂碩學、僞儒雲集して、如何にも文運隆盛の偲ばるゝが如きも、焉んぞ知らん、平安朝と同く皆、支那學の糟粕を嘗むるに過ぎずして、支那學者に超越せるものは江戸三百年を通じても、遂に一人も出でざりしが如し。之れに反して、大阪は上、爲政者の何等の奬勵なく、全く自發的に、近代文學の粹と稱せられ、英國文豪シエキスピアに比せらるゝ、近松門左衞門を出し、淨瑠璃なる名の下に、我國一種特有の劇文學を創成し、井原西鶴出でゝ、源語と千歲の下に對照す可き、多くの寫實小說を出す。此二人者を最大の代表者とする、此等文學こそ、眞に大和民族の獨創にして、世界に誇る可きものなり。それが由緒も明かならぬ、平民の手に成りしを想ふ時、近代色の鮮明に感せらるゝなり。

然り、表面上の敎育の仕事は、從來寺院の下にありしもの、今や儒者の手に移り庶民の讀み書きを習ふ、寺子屋の名あるも實は、儒者又は浪人武士の仕事となれり。此は從來と異なり、智識階級は最早僧侶階級に止まらず、否、宗敎の形式化せるも

のから、實力ある僧侶は、身を僧籍に置くを好まずして、儒者となりしものも多くなり、こゝに智識文化の實力は、寺院を去つて、官民の間に移りたるなり。

德川時代、諸國大小名の數、三百と稱せらる。此等大小名は、德川氏と同く皆、武士階級に屬するものなれば、武藝を奬勵せるは云ふ迄もなけれども、太平の世の中のことなれば、之れを實戰に用ふる機會は殆んど得られず所謂、御前試合に、名譽の勝利を得るを花とせるものから、今日の野球、蹴球、庭球などの競技と、相似たるものと化したるは、止むを得ざる變遷なり。されど一方、文敎に至つては、太平の世に最も必要なるものなれば、諸國の大小名は、競つて之れが振興に熱心し、名君の藩主となれる地は特に、盛大を致す。備前の池田光政、水戸の德川光圀の如き、其最たるものなり。こゝに從來、中央にのみ集まりし文敎は、廣く日本各地に散布するに至れり。固より、第一流の人物は、多く江戸に集まる風ありしも、文敎の一般に廣まれること、前古其比なきは、封建制度の贈物なり。然り福岡に貝原益軒あり備前に熊澤蕃山あり、近江に中江藤樹あり、水戸に藤田東湖あり、第一流人物の悉く江戸に集まりたるには非ず。かくて日本の文敎は全國的に大に擧れり。但、有職故實の學、茶の湯、生花、さては琴の宗匠、家元は依然として京都に存したるは、其性質最も京都にふさはしきと、傳統を重んずるより、自ら然りしものか。

さて、德川氏の治世には儒學は最も適切なるものなりしかば、家康以來、之れが奬勵に努め、中にも朱子學派は、官學となりて最も勢力あり、藤原惺窩、林羅山を初めとし雨森芳洲、新井白石、室鳩巣、山崎闇齋、貝原益軒など人材多く之れに集まる。之れと對抗して、常に相下らざりしものは、陽明學派にして、中江藤樹を筆頭として熊澤蕃山、中根東里など、其人材の數は固より、朱子學派に遠く及ばざるも、陽明の學風を傳へて、潑溂たる英氣は、常に朱子學派の恐るゝ所となれり。

熊澤蕃山は、池田光政を助けて、大に其藩政に異彩を放たしめ、中江藤樹は、近江聖人となりて、社會敎育家の權化となる。朱子派の學者の、多く理論に拘泥して

實際に功少なかりしものと、大に相異なるを見る。概して朱子派は、其氣慨に於ては、陽明派に及ばざりしものゝ如し。尤、朱子派にも新井白石の如き人物なきに非ず。白石は漢學を應用して我國の言語、歴史、制度を研究し、卓見少なからず。折焚柴の記、藩翰譜など名著多し。されど彼の如きは寧、例外とす可きか。

此外、古學派あり、折衷派あり。古學派には、伊藤仁齋、荻生徂徠あり。仁齋は溫厚篤實の人格者にして、其高風を慕ひて來り學ぶもの、前後三千人に及べりと云ふ。其子東涯能く家學を繼ぎ、愈々堀河學風を擴めたれば、一時天下の學生の七八分は此流に歸したり。

仁齋の唱へたる古學と、朱子學との相異なる所は、孟子四端の章の解釋の差より起る。朱子は四端を以て、本然の性を回復する、手がかりと見たるも、仁齋は此復初の說に反對し、性は四端を大成す可き萌芽なりと解釋せり。此萌芽は種々あるも主たるものは四端なり。之れを擴充すると云ふは、此端を次第に伸して行くことゝ解したるなり。又修德の標準に付ては、宋儒は之れを聖人に置けるも、仁齋は君子に置けり。仁齋想へらく、聖人とは至極の德を指す。一德にても其極に達せるものは、たとへ少しく偏する所あるも、聖人と云ふて可なり。孟子は孔子、伯夷、伊尹柳下惠等を皆聖人と稱し、伯夷以下に付ては「隘と不恭とは、君子由らざるなり」と云へるより推せば、聖人偏するあるも、君子は偏するを忌む。即ち君子は、中庸を得ることを條件となす。されば君子の至極に達せるものを、聖人と稱して可なるも聖人は悉く君子なりとは云ひがたしと。此の如く、宋儒と反對の意見多く、古學に遡るよりして、其派名を得たるなり。徂徠も、仁齋に倣ふて、古文辭を研究し、孔子の眞意を玩味するには、先秦文學を究明せざる可からずと云ふ。其人物は、仁齋の如く溫厚に非ずして、圭角ありしためか、德望は仁齋の如く篤からざりき。彼れが、自ら夷人物茂卿と名乘れる爲め、國學者などより、大に非難されたるも實は、當時の漢學者は、平氣に、日本を東夷と稱せり。蕃山なども自ら、東夷の小生と云へり。

徂徠は、荀子の説に基き、道は聖人の天下を治むる爲めに、作爲せるものにして、天地自然のものに非ずと云ふ。即ち道は、禮樂刑政凡て、先王の立てたるものを總稱せるなり。されば學問は必ずしも、經學に限る可きに非ず、諸子百家曲藝の士となるも可なり。故に徂徠は、其學則の終りに、「故に學んで寧ろ、諸子百家曲藝の士となるとも、道學先生となるを願はず」と云へり。德川時代に、此の如く放言せるは、たとへ其源流を荀子に得るにしても、卓見家にして、眞の學者的良心あるものに非ずんば、能はざるなり。徂徠はまた、漢籍の直讀を主張し、自ら岡島冠山に就て、支那音を學び支那音を以て直讀するの風を開けり。彼れの文章が、前古無比、支那人の壘を摩するに至れるもの、故ありと云ふ可し。

折衷派を代表せるものは、細井平洲なり。平州が日本の中京、名古屋に出でしことは、其主張の折衷にあると、何等かの因緣あるを感ずるなり。彼は折衷派、中西淡淵に就きて德び、學成りて江戸に敎授せり。米澤藩主上杉鷹山侯の知遇を得て、藩の學政に參與し、興讓館の發達に、貢献する所多し。後鄕里尾張侯の知る所となり、藩學明倫堂の振興に力を致せり。彼は折衷派に屬するだけありて、凡ての事に何流何派と、流派を立つることを大に忌み、味噌の味噌臭きは、上味噌に非ず、學者の學者臭きは、眞の學者に非ずと戒めたり。されば、仁齋、徂徠等の宋代諸儒の學說を攻擊せるを、極力非難せり。

興讓館は、何流ヶ流と申流儀の立ぬ樣に、御勸被成度事に候。唯一筋に、四書五經を本經とし、歷史記傳を羽翼として、浮華の習氣不出樣、相勤度候。能相心得候へば、かな物語を見候ても、心術事業の助には相成候。近來、徂徠學を致す者の樣、聞取に、法向(ひたむき)に古人を口廣く致誹謗、自己之分限をも不顧、不德の言行をのみ習候者、淺間敷事に候。先は徂徠學を尊崇致候而、古賢の事業を、一概に廢棄致し候は、近來の痛患に御座候

と云へるなど、折衷派の面目躍如たり。又平洲は、敎育上、個性の重んず可きこと

を主張せる一人なるが、敵手徂徠もまた、德川時代に於ける、個性尊重論者なりしことは、一種皮肉の感なき能はず。

人を敎へ候ても百人が百人、一樣に不參もの、人心は各々別なる事は、不及申上候。孔夫子三千の弟子、七十人の親炙の弟子達も、人々心慮も別段、所行も殊異にて、盡く一統には相見え不申候。乍併、聖人の德化にて、何れも善良の君子に被相成、大は大、小は小、それ〳〵に世界の用に立つ人計と、相見え申候。聖人の御德にても、御一樣に敎へ立てられ候事は、不相成ものかと被存候。併し人が善良に相成候所は、一同に御座候

要するに平洲は、學者と云ふよりは政治家的の人物なりき。

さて漢學は、德川氏初世より、大に之れを奬勵したれば、早く發達の運に向ひしも、國學の發達は、之れに比し大に相後れ、元祿時代を待たざる可からざりき。僧契沖は、實に其先驅者なりき。彼は日本最古の文學、萬葉集の研究に、一新時期を開く。其後繼者となりしは、賀茂眞淵にして、荷田春滿の弟子なり。其古代思想及道德の研究は、「國意考」に總括せらる。眞淵の弟子に、本居宣長あり。其一生の心血を注ぎて研究せる結晶は、古事記傳四十八卷にして、實に江戸時代最大の著作なり。宣長の弟子、平田篤胤は、古神道の唱導に力を注げる結果、大に儒佛を排斥し是れより國學者と、儒佛者との衝突の端大に開く。然り、儒學者に對する挑戰は、宣長己に之を試みしなり。彼は云ふ、道は聖人が、己れの非行を飾らんが爲めに、作爲せるものなり。舜は堯の位を、禹は舜の位を奪ひし故、之れを飾らんとせるなり。されば聖人は、善人らしく見せかけて、實は惡人なり。本來道は、汚れたる心を以て、作られたるものにして畢竟、世を欺き、己れの欲を遂げんとするに過ぎざれば、世人も、表面之れに從ひ、眞に信奉するものなし、故に少しも、國家社會の助けとならずして、代々儒者の囀り草となるのみ。然るに我古道は、かゝる人爲の道に非ず、さりとて、天地自然の道にも非ず、實に高御產巢日神の御靈により、伊

邪那岐、伊邪那美の二神の始め給へる神の道なり。神は生ける我が皇祖なり。其道に系統こそ立てられ居られざるも、廣大無邊にして、四季の變化、風雨、晝夜、國土、山川、人事、吉凶、禍福皆包括せられざるなし。不幸災禍も亦神の道なり。善人にも不幸あり、惡人にも幸なる事あるが如きは、人智に測りがたき神の道の深く尊き所なり。人は皆神の御靈に導かれて、生れたるまゝ人として有る可き限りの行は、自ら知り且つ能くするものなり。されば人々は、程々につけて、有る可き限りの業を營み、平穩に樂しく世を渡る可しとなり。一種の生得說とも見られ、自然主義とも云ふを得べし。然らば、人としてあるべき行爲の大本は如何。其は道の根源たる神を崇め、神の御子孫たる天皇に、よく仕へ奉るにあり。想ふに、產巢日神の始めたまひし道には善惡、禍福種々あり。されど私心を立て、其れを道理上より是非曲直を推論す可きに非ず。唯神の道をひたすらに、恐れ惶み崇め奉る可きのみ。然し生活の爲めに必要なる知識技能は、生得するものに非ざれば、其の爲めに教育の必要あり。要するに、神の御心より出でたる、人間天然の素直なる心に歸り、凡ての人爲的虛飾を捨つるより外、道德もなく、教育もなし。之れを神ながらの道と云ふが、宣長の意見なるが如し。

以上に列擧せる和漢學者は、何れも、直接間接、教育に付ての意見なきはあらずと雖も、余は德川時代を通じて、教育家の二大代表者として、貝原益軒と、山鹿素行とを擧げんとす。

第二節　代表的教育者

益軒は、筑前黑田侯の侍醫の子にして、寛永七年に生る。生來極めて病弱の人なりしも、非常なる忍耐と養生とに依て、八十四歲の長壽を保ちたり。時は德川氏第四代より、第五代第六代に亘り、英國のロックと粗同時代にして、二人共に、醫學上の素養ありて、体育に就ての造詣深かりしは、一奇とす可し。益軒は二十八歲の

時、京都に遊學し、木下順庵、山崎闇齋、松永尺五等に就て學ぶこと三年、それより歸藩して、四十四年の長年月、藩の教育に盡したり。德川時代、人物多しと雖も益軒の如く、教育の理論と實際とに、造詣深きものはなかる可し。

益軒は頗る、溫厚篤實の君子人にして、大体上、獨學大成したる人なり。初めは陸王を學びしが、性格に合はず。後朱子學に行きしも、晩年大疑錄の著あり。程朱の學にも疑義を懷きたれば、獨立學派に屬すと見る可きなり。益軒の著書極めて多し。特に一般民衆の讀み易き著書多く、社會教育に貢献するの大なる、他に比類なし。家訓、君子訓、大和俗訓、樂訓、和俗童子訓、五常訓、家道訓、養生訓、文武訓、初學訓にして之れを世に益軒十訓と稱す。

益軒は學、儒佛を兼ねたるのみならず、地理、歷史、言語、本草學にも通じ、醫學にも精しく、當時日本に存在したる百科の學にして、彼れの通ぜざるものは、殆んど無かりしが如し。其教育說は、十訓の到る所に述べられ「愼思錄」にも詳述し居れり。

大和俗訓に曰く、

凡そ人は、天地の萬物を生み育て給ふ、御惠の心を以て心とす。此心を名けて、仁と云ふ。仁は人の心に、天より生れつきたる本性なり。仁の理は、人を惠み、物を憐むを德とす。此の行の德を保ち失はずして、天地の生みたまへる人倫をあつく愛し、次に鳥獸草木をあはれみて、天地の人と萬物とを愛し給ふ心にしたがひ天地の御惠の力を助くるを以て、天地に仕へ奉る道とす。これ即ち、人の道とする所にして仁なり。仁の理を分てば、仁義なり、仁義を分ては禮智信となる。五の性をすべて五常と云ふ。

又曰く、

凡そ人となる者は、人の道を知らずんばある可からず。人の道を知らんとならば聖人の教を尊びて、其道を學ぶ可し。いかんとなれば、聖人は人の至極なり。天

地の道にしたがひて、人の道を教へ給はる、萬世の師なり。後代に殘して置き給ふ、四書五經の教は、萬世の鑑なり。其道理明かなること、日月の天にかゝれるが如く、天下廣しと雖も、照らさゞる所なし。よく讀まん人は、天下の道理を知らんこと、白日に黑白を分つが如くなる可し。豈是を學ばざる可けんや。

此は、教育の必要及教育の目的を述べたるものにして、大体上儒教の說く所を、通俗的に述べたるものなり。益軒は又、教育の根本動機を述べて曰く、

天地は萬物の父母、人は萬物の靈なりと、尙書に聖人とき給へり。言ふこゝろは天地は萬物をうみ給ふ根本にして、大父母なり。人は天地の正氣を以て生るゝ故に、萬物にすぐれて其心明かにして、五常の性を受け、天地の心を以て心として、萬物の內にて其品、いとたふとければ、萬物の靈とはのたまふるなる可し。人は萬物の靈たる故に、心に五性あり、身に五倫あり、目に五色を分ち、口に五味をおぼゑ、耳に五音をわきまへ鼻に五臭を知る。鳥けだものには此のあまたのことも一もなし。

當時、階級制度甚だしく、士のみ人格を認められ、農工商の如きは殆んど、人格を認められず、隨て教育の必要も、認められざりし時代に於て、益軒は常に、教育の四民共に必要なることを說けるは、誠に卓見と云ふ可し。學者一般に漢學を學び、漢文を書き、漢詩を吟じて、能事終れりとするの時に於て、所謂益軒十訓の如き、親切を極むる通俗教訓書を著し、廣く社會民衆を對象として、其生涯を捧げたるは實に儒教を活かし用ひたるものと云ふ可く、民衆讀み物と云へば、淨瑠璃、お伽草子の外なかりし時代に、此數々の教訓書を連發して、社會を稗益せる、誠に多とす可し。若しそれ、益軒の教育實際論に至りては、詳細懇切を極めたるものにして、歐米にも其例稀なり。

益軒謂へらく、天地の道は廣大なり、聖人の教は深淵なり、學者の一生を費すとも到底之れを盡す可からず。されど、其卑近なるものは、匹夫匹婦兒童走卒と雖も

理會し得べし。人を教育するには先、日常平易の道よりす可く、徒らに高遠の說をなすは聖人の道に非ず。人々の器量に相應せしめて、漸次高尙なる方面に誘導す可きなり。所謂、下學して、上達すと云ふは此意なり。さて學には、知と行との二面あり。知らざれば行ふ能はず、知は行の端緖なり。しかし凡ての事を知り盡して然る後に、行ふ可しと云ふにはあらず。一事を知れば、一事を行ひ、一事を解すれば直ちに之れを實行す可きものにして、知行は必ず並進せざる可からず。而て知より行に進む順序は、中庸に說ける如く、博學、審問、愼思、明辯、篤行の五段なり。

益軒は、被教育者の立場より、立志の必要を說て曰く

學問は先づ、志を立つるを以て本とす。志とは心のゆく所なり。道を知り行ひて君子に至らんと思ふ心、常に怠りなく、愈々やまざるを、志を立つると云ふ。志たゝざれば、學ぶこと成就せず。故に古人も志ある者は、其事の遂に成ると云ひ又志を立つるは、學の半なりと云へり。

志を立つること、大にして高くす可し。小にして低ければ、小成に安んじて、成就しがたし。天下第一等の人とならんことを、平生志す可し。上を學べば中にいたり、中を學べば下にいたる。下を學べば功をなさず。

想ふに、古より立志を說くは、東洋教育說の特色とも云ふ可く、西洋教育說には此事多からず。近時自學自習主義を說くに至て、幾分立志を云ふも、東洋の如く精ならず。此は西洋教育は、教授を第一とし、東洋教育は、訓練を中心とするの差より來れるものか、「間想客感、志の立たざるに由る。一志已に立つ、反邪退讓す。是れ淸泉の湧出して、傍水の混入し得ざるが如し」など云へるは、如何に訓練的教育の色彩の濃厚なるかを、想はしむるに十分なり。

益軒謂へらく、教育は幼年程必要にして、其功果もまた多し。親は幼時より絕え間なく、教導せざる可からず。始めて食し、始めて言葉を遣ふ頃より、人の顏を見て或は喜び或は畏るゝ、感情、本能を利用す可し。早く善事を教ふ可し。一旦惡癖

を生ずれば、之れを矯正するは、非常に困難なり。幼少の頃より、行儀作法に習熟せしめ、戯言を弄せしめず、物事は萬事、不足勝にす可く、決して氣まゝならしむ可からず。幼成は天性の如く、習慣は自然の如し。

智育に付ては、農工商は、讀書算を實用的に學び、家職に通ずればよしとす。士分は仕事の範圍廣く且復雜なれば、單に一藝一能に長ずるのみにては不可なり。先づ經を根本として、史を參考とし、文藝としては、禮式、書法、算數より詩文に及ぶも可なり。國俗算數を卑しみ、大家の子弟に敎へざるは、心得違ひなり。武藝も習熟す可きは勿論なり。此等の學藝を修むるには、明師と良友を選ぶこと、最も大切なり。

學問は文武兩道とも、藝は末にして、德は本なり。文の德は、忠孝義理の道、武の德は、忠孝義理の勇なり。

益軒は、隨年敎法を立て、敎育は年齡に適合して、簡より繁に、易より難に進まざる可からずとなす。隨年敎法の名稱は、恐らく益軒の附したる所なる可きが然し其說の淵源は、禮記の內則に在り。益軒は、和俗童子訓に、隨年敎法の內容を詳述せり。其敎程を見れば、努力主義、硬敎育なること察せらるゝなり。若し一日に、一百字づゝ、復誦して怠らざれば、一年半にて、四書全部を誦記し得べしと云ふが如きは、其一例とす可し。

体育に付ても大体上、鍛錬主義を採れり。小兒には、三分の飢と寒とを存す可し。小兒に、味よき食に飽かしめ、きぬ多く着せて溫め過すは、大にわざはひとなる。小兒は、陽氣さかんにして熱多し。常に熱を漏らすことに注意す可し。溫め過せば筋骨弱し。天氣よき折には、外に出して風日にあたらしむ可し。かくすれば、身体堅固にして、病なしなど云へり。養生訓には、体育衞生上の意見を詳述せるが要する所、寡欲にして、氣を平靜にし、妄りに動かず、緩やかにして、急がざるを可とす。然し大体上より察すれば、益軒の養生訓は、積積的鍛錬主義に非ずして寧、消

極的養生法なるが如し。たとへば唾を吐くにも、強く遠くへ飛ばす可からず。氣を損耗す可ければなりと云へるなど、其一例なり。

若しそれ益軒の女子教育論は、儒教主義を徹底せるものにして、たとへ、女大學は、世人の信ずる如く、益軒の作に非ずとするも、また、其妻東軒の作とする說も疑はしとするも、其主義は益軒否、德川時代を通じて、尊信せられたるものたるや疑なし。然り、女大學は、儒教主義の女性觀よりして、七去、三從、四行の主義に據れるものなり。七去とは、一に、父母に順はざるは去る。二に、子なければ去る。三に、淫なれば去る。四、妬めば去る。五に、惡疾あれば去る。六に、多言すれば去る。七に、竊盜すれば去る。次に、三從とは、一に、父の家にありては、父に從ひ、二に、夫の家に行きては、夫に從ひ、三に、夫死しては、子に從ふ。又四行とは、一に婦德。二に婦言。三に婦容。四に婦功。四行中、最も重きは、婦德なるは勿論にして、婦功之れに次ぐ。女は和順にして愛敬あり、操貞しく、假りにもたはれたる心を持たず、堅く節義を守るの修養なかる可からず。されば幼時より、小唄、淨瑠璃、三味線の類を、玩ばしむ可からず。源語、伊勢の如きも、早くより讀ましむ可からず。

益軒を、社會教育論者とすれば、素行は、武士教育論者と云ふ可し。素行も、學問は、士農工商皆必要なりと說けるも然し、彼れの生命は、武士道の鼓吹者たるにあり。山鹿素行は、幼より江戸に住し、儒學、兵學より廣く、各般の智識を修得せり。されど、彼は最も兵學者として、天下に聞えたれば、諸侯武士の教を請ふもの多かりしかば、蕃山と同く、幕府の忌む所となる。寛文六年、彼は聖教要錄を著はし、朱、王を排して、古學を唱導せり。將軍家綱の輔佐、保科正之の怒りに觸れ、赤穗に謫せらる。後年赤穗四十七士の義舉は、全く素行の感化の實を結べるものなり。山鹿語錄、配所殘筆などの名著あり。

素行は、士節を論じて曰く、身を委するは臣道なれば、節に當ては、身を捨てゝ

死を輕んずること、是れ即ち、臣の義なり。常に身を衞ることを勤むるは、家を忘れ、私を顧みざるを以て元とすと。赤穗四十七士は、之れを文字通りに實行せるなり。

素行は德と才卽ち、智育と德育との關係を論じて曰く

德と云は、我天より所〻得において、不〻得〻已のりある所ある、是を德と云なり。その內にある時は、德と號し、その練る所に因ては、仁義禮智信の名あり。その情は、惻隱、差惡、辭讓、是非の分あり。是强いて然らしむるに非ずして、各々自然の天則の理なり。此德を明にすることは、事物にわたる所の才あらずしては明なるべからざるを以て、德は才に因てあらはれ、才は德によつて行はる。其差別を云ふ時は、二つにして其實体は一元なり。こゝに德、いかんしてつとむべきと云時は、身の言行を正しくして、其情欲をほしいまゝならしめざる、是物のつとめ也。才いかんしてつとむべきとならば、外人倫事物に相交るの間、彼天德を本として、その事物に相應の理を、詳に盡さしむる、是才のつとめ也。然れば、小兒孩提の內より、情欲をほしいまゝならしめず、其言行を、安靜崇敬ならしめ五倫の交接、衣食居の用、平生の事物について、其の法用を知らしめて、德才共に備るが如く、是を輔養すべし。德を養には、才を以てし、才を用には、德を本としてこそ、內外本末、こゝに兼備しぬべし。

朱子派は、才より德に進むと云ふ。素行は、才より德に進むこともあれば、德より才を養ふこともありと云ふなり。

素行想へらく、風俗を正すには、學校を設立すること、最も上策なり。學も校も人に道德を敎ふると云ふ、字義を有す。敎育は士にのみ必要なるに非ず。農工商を通じて、萬民に必要なり。さて、敎育普及の方法としては先、町村に存する、寺社を改めて學校とし、僧侶、神官を敎師として、其子弟を敎化し、冠婚葬祭等の大禮を正さしめ、五倫の敎を全くせしむ可し。又讀書、習字の師匠を町毎に置き、其費

用は町の負擔とす可し。

こゝに余は、教育經世論者として、佐藤信淵を附記せんとす。彼は米艦の浦賀に來る三年前の、嘉永三年に八十二歳を以て沒したれば、益軒、素行などよりは遙かに後の人だけありて、家學の農學の造詣深き上に、蘭學を修め、經濟、天文、測量醫術等を學び、天下を周遊して、貿易の利を說き、海防策を講じ、林子平と交はり、更に國學を平田篤胤に學び、古道の發揮に其生涯を捧げたり。有名なる農政本論の外に、混同祕策と云ふ、面白き著作あり。德川時代に於て、教育の制度を、是れ程詳細に且、大規模に、說けるものはなかる可し。此書は、世界各國惡政に苦しめるを以て、我國は、世界を混同統一して、之れを救濟す可しと云ふ、夢の如き侵略主義を述べ、先、都を江戸に遷して東京として、皇居の西に皇廟、東に大學校、北に教化臺、南に神事臺、其更に南に太政臺を配し、周圍に諸官署を置く。大學校には、造化の三神、日の神、天兒屋根神、天太玉神を祭り、其前面に法座を設け、日々教化大師に、法教を講ぜしむ。大師は造物主に代りて產靈神の大道を說くものなれば、出入には音樂を奏し、法座は珠玉金碧を以て飾る。中師、小師、亞師は法座に上らず、別の講座にて說法す。天子の制令は、凡て大學校より發し、諸官人の選擧も、政事の合議も、こゝに行ふ。會議の結果、小事は卽行し、大事は宗廟に祭告して、後に行ふ。

教化臺は、凡ての學校の生徒を支配す。職員には大師、中師、亞師、上官、中官下官の別あり。學生は誠明、神祇、儀禮、音樂、法律、武備、醫術、天文、地理、通譯の十科に分つ。之れを小規模にせるものを、諸國に置き、學政を行ひ、人材を教化し、風俗を美にし、產靈神の御魂を弘む。地方の學校の官吏は、領主の支配を受けず。位も領主より上に置く可し。石高約二萬石ほどの地には必、小學校を設け村の教育所の生徒中、俊秀のものを收容し、洒掃、應對、進退の禮を教へ、四書、小學、近思錄、及六經の素讀を教ふ。時に村民を會して、道學を講ず。小學の生徒

中、優秀のものは、大學に貢献す。凡庸者は、家產に從事せしむ。更に學校の配下に、廣濟館を設けて、萬民の困窮せるものを救濟し、療病館を立てゝ、衆民の病苦を救ひ、慈育館を設けて、貧民の小兒を養育し、村々に遊兒廠を設けて、七歳迄の小兒を遊ばしめ、教育所を置て、八歳以上の童子を教育し且、村民を善導す。

德川時代は、萬事が所謂箱詰め的なりしが爲めか、空想を語り、夢を說くもの、殆んど無かりしに、獨り信淵の神事と教育とを中心として、社會の大改良を說きたるは、例令一種のユートピアに近きものとは云へ、興味多し。況んや幼稚園、託兒所、療養院の計畫迄立てたるは、卓見と云ふ可きに非ずや。

第三節　學校

德川時代も、元祿前後より、文教大に興り、諸藩競ふて藩學を興す。幕府直轄の學校として第一に數ふ可きは、昌平黌にして、代々林氏を以て其學頭となし、實に官學たる朱子學の本據たり。初め忍岡にあり、林羅山の私塾たり。五代將軍に至り湯島に移す。しかし依然たる林氏の私塾たり。家齊の時松平定信の老中となるや、大に力を儒學に注ぎ、柴野栗山等を聘して教官とし、朱子學以外の異學を禁ず。尾藤二洲、古賀精里など學賓となるに及んで、益々盛大に趣き、寛政四年、大に學舍を改築し、始めて經義、史學、時務、作文の四科を試驗せり。之を學問吟味と云ふ。定信は、寛政五年に、引退せるも、同九年に、幕府は、斷然聖堂を官學に引直し、學問所と稱し、專ら幕臣の教育所と爲せり。寛政十二年には、校舍全く完成す。敷地一萬一千六百坪、建築物は大成殿(聖堂)、聽堂(座敷)、講堂(稽古所)、學舍(寮)、教員の官舍等に分る。

昌平坂學問所の外、幕府直轄の學校には、和學講讀所、醫學館、蕃書調所などあり。

又諸藩の學校中最も古きものは、名古屋の明倫館にして、藩祖義直の立つる所な

り。此外有名なるものは、鹿兒島の造士館、熊本の時習館、米澤の興讓館、會津の日新館、水戸の弘道館、福岡の修猷館等なり。

庶民の教育の爲めには、寺子屋益多く、極めて卑近實用的の教育を爲せり。幕府も諸侯も、別に補助もせず、干渉も試みず、自由に委せられたり。名頭、苗字盡、商賣往來、風月往來、庭訓往來、實語教、童子教などを手本として、習字を學ぶを第一とし、中には八算、見一位の平易なる算盤を教ふるものあり。されば、少しく志あるものは、儒者の私塾に入り學問するを常とす。私塾は到る處に開かれ、三浦梅園、廣瀬淡窓の塾などは最も成功せるものなり。

一般社會教育としては、僧侶の說教位のもにて、別に著しき機關なし。唯石田梅巖の創めたる、心學道話は、廣く世上に行はれ、民衆教育に貢献せること甚だ大なり。

終りに附記す可きは、天主教と我國文教との關係なり。天文十八年卽ち、小銃が種子島に傳へられてより六年の後、葡萄牙の耶蘇會に屬するフランシス●ザビエル我鹿兒島に上陸し、九州にては、大友氏などの熱心なる信者出て、忽ちにして全國に弘まれり。其後三十年を經たる、信長の晩年には已に、教會の數二百、信徒十五萬を算せりと云ふ。天正七年、印度より來れるアレキサンドロ●ワリニヤーニは、日本の耶蘇教會を管し、大に教育に盡せり。先づ、肥前の口の津にて、教父の會を開きて、將來の方針を定め、次で有馬晴信に請ふて、城下に學林と修業所を建て、翌年には、豊後の大友義統に請ふて、同じく學林、修練所を建つ。天正九年には、上京して信長に謁し、近江の安土に、修業所を建つることを許されたり。修業所は、上流の少年に、天主教的の教育を授くる所にして、修練所は、進んで耶蘇會士たるものを、訓練する所たり。又學林は、日本人並に宣教師に、語學其他の高等教育を授くる機關なりき。安土の修業所には、信長も參觀に來り、日向の伊東氏の次男が洋樂を奏するを聞き、大に之れを喜べりと云ふ。若し此等の學林等を、其まゝ自由に發展せしめたるならば、維新は必ずしも、明治を待たず、德川氏の文化は恐らく

今日歴史に殘る所のものとは、非常に相異なるものとなりしならん。然るに、秀吉より以後、耶蘇教を嚴禁したる爲め、遂に中絶せるは、惜しても餘りあり。されど踏み繪、虐殺のあらゆる迫害をも意とせず、窃に之れを信仰したるものは、各地に殘留せるが如し。特に耶蘇教に附隨したる西洋文化は、一部國民の驚異敬歎を買ふに十分なりき。されど、德川時代を通じて、表面上、我國の文化に貢献せるものは蘭學のみなり。此は和蘭のみ、通商貿易を許されたるに由る。

第四章　明治時代

第一章　明治初年

德川家光、父祖の積威を籍て、諸侯を威服し、國民に令して、五百石以上の大船を造るを禁じて、こゝに、事實上、鎖國勵行せられてより、國民は豆大の島帝國に桃源夢裏、三百年の長夜の眠りに耽る。固より、志士先覺者の中には、早くより歐米文明に憧憬を有するものありしが如きも、其は以て異例に屬す。然るに、嘉永六年、米艦浦賀に來り、國民太平の夢こゝに破れ、世は擧げて鼎の沸くが如く、幾多の悲喜劇を演じたる後、こゝに明治の維新大改革となる。

明治元年三月十四日、明治天皇は紫宸殿に出御、天地神明に誓て、五個條の御誓文を煥發せられたり。是れ實に國是の大方針にして、明治の文化が、前古未曾有の大發展を遂げたるもの、固より、大帝の御稜威の然らしむる所なりと雖も、國是先確立して、國民勢力集注の大中心を得たること、與て大關係なくんばあらず。

一に曰く、廣く會議を起し、萬機公論に決す可し。

二に曰く、上下心を一にし、盛に經綸を行ふ可し。

三に曰く、官武一途、庶民に至る迄、各々其志を遂げ、人心をして倦まざらしめ

んことを要す。

四に曰く、舊來の陋習を破り、天地の公道に基く可し。

五に曰く、智識を世界に求め、大に皇基を振起す可し。

想ふに、此國是確立し、上に不世出の大皇帝あり、之れを輔くるに、維新の三傑を初め、幾多の有名無名の志士論客あり。何れも所謂大和魂の所有者にして、國家を先きにし、一身の安危を顧みざりしことが、彼の如き大業を成就せしめたる、大原因たらずんばある可からず。隣國支那も、人物出でざるに非ざるも、眞に一意專心國家を想ふものゝ出でざることは、我の大業を模せんと欲して、遂に得ざる所以なる可きか。

明治五年八月、學制を頒布して、全國に統一的の教育制度を布くことゝなれり。其前月に太政官より發布せられたる、「仰被出書」の全文左の如し。

人々自ら其身を立て、其產を治め、其業を昌にして以て、其生を遂る所以のものは、他なし、身を修め、智を開き、才藝を長ずるによるなり。而て其身を修め、智を開き、才藝を長ずるは、學にあらざれば能はず。是れ學校の設ある所以にして、日用常行、言語書算を初め、士官農商、百工、技藝及び法律、政治、天文、醫療等に至る迄、凡、人の營む所の事、學あらざるはなし、人能く、其才のある所に應じ、勉勵して之れに從事し、しかして後初めて、生を治め、產を興し、業を昌にするを得べし。されば學問は、身を立つるの財本とも云ふ可きものにして、人たるもの、誰か學ばずして可ならんや。夫の道路に迷ひ、飢餓に陷ゐり、家を破り、身を喪ふ徒の如きは、畢竟、不學よりしてかゝる過を生ずるなり。從來學校の設ありてより、年を歷ること久しと雖も、或は其道を得ざるよりして、人其方向を誤り、學問は士人以上の事とし、農工商及婦女子に至つては、之を度外に置き、學問の何物たるを辨せず。又士人以上の稀に學ぶものも、動もすれば國家の爲にすと唱へ、身を立つるの基たるを知らずして、或は詞章、記誦の末に趨り

空理、虚談の途に陷ゐり、其論高尚に似たりと雖も、之れを身に行ひ、事に施す事能はざるもの少からず。是すなはち、沿襲の習弊にして、文明普ねからず、才藝の長せずして、貧乏、破産、喪家の徒多きゆゑんなり。是故に、人たるものは學ばずんばある可からず。之を學ぶには宜しく其旨を誤る可からず。之に依て、今般文部省に於て、學制を定め、追々教則をも改正し、布共に及ぶ可きにつき、自今以後一般の人民、華士族農工商及婦女子必ず、邑に不學の戸なく、家に不學の人なからしめん事を期す。人の父兄たるもの、宜しく此意を體認し、其の愛育の情を厚くし、子弟をして必ず、學に從事せしめざる可からざるものなり、高上の學に至ては、其人の材能に任かすと雖も、幼童の子弟は、男女の別なく、小學以下に從事せしめざるものは、其父兄の越度たる可き事。

但、從來沿襲の弊、學問は、士人以上の事とし、國家の爲にすと唱ふるを以て學費及其衣食の用に至る迄、多く官に依頼し、之を給するに非ざれば、學ばざる事と思ひ、一生を自棄するもの少からず。是皆惑へるの甚だしきものなり。自今以後、此等の弊を改め、一般の人民他事を抛ち、自ら奮て必ず學に從事せしむ可き樣、心得べき事。

右之通被仰出候條、地方官に於て、邊隅小民に至る迄、不洩樣便宜解釋を加へ、精細申諭、文部省規則に隨ひ、學問普及致候樣、方法を設可施行の事

明治五年壬申七月　　太　政　官

此仰被出書の全文を通じて、一貫せる趣旨は、德川時代の、道德主義にもあらず、維新の大業を成就せる、尊皇愛國主義にもあらずして、アメリカニズムの功利主義なり。蓋、日本の開國を促したるものも、米國にして、維新前後に最も多く見聞せる西洋風なるものも、米國風にして且、從來、我國に缺けたるものは科學應用の、實利的方面なりしが故なる可し。其は兎も角、此功利主義は、長く我國の教育を支配し、教育の眞の意義を理會するものゝ少きは、遺憾の事と云ふ可し。

右の趣旨に依て、當時制定せられたる學制は、頗る大袈裟のものにして且、中央集權的のものなりき。則ち全國の學事は、文部省之を統一し、國内を八大學區に分ち、每區に一大學を置き、一大學區を三十二中學區に分ち、每區に一中學校を設け、一中學區を二百十の小學區に分ち、每區に一小學校を立つる事とせり。

之れを實現する時は、大學八校、中學二百五十六校、小學校五萬三千七百六十校となる。以て其の規模の大なるを見るべし。奬學の趣旨書は、アメリカニズムなりしに拘はらず、此學區制度は全然、佛國に模したるなり。さて右の大中小學の中、先づ最も力を盡して、實現に努めたるものは、小學にして其後幾多の迂餘曲折はありと雖も、其進程は極めて速かなるものなりき。明治十一年に、早くも二萬六千五百八十四校を算し、就學步合、四十一パーセントに達したるを見て知るべし。小學校の發達を期する爲めには、第一に教師の養成を必要とす。依て明治五年五月に、昌平黌の跡に、東京師範學校を建て、米國人スコットを聘して、米國模倣の教授をなせり。次で大阪其他の大學建築豫定地に、官立師範學校を建て、明治七年三月には、東京女子師範學校を設けたり。明治八年八月、東京師範學校に、中學師範學科を置く。明治十一年に、伊澤修二、高嶺秀夫の二氏米國より歸朝し、東京師範學校に教鞭を執るに至て、面目大に改まれり。二氏は米國マサツチセツト州の師範學校に學びし人なり。

第二節　文教興隆時代

明治十年の西南役により、我國は、財政的にも、可なり打擊を受けたるのみならず、何分、直譯的の教育制度なりしかば、從來の國俗民風に合致せざるものも多く到る所に矛盾撞着を生じ、大勢は進步の道をたどりつゝも、常にリズムあるを免れざりき。然るに、明治十八年十二月、森有禮の文部大臣となるに及んで、明治の教育に一新紀元を劃せり。彼は慶應元年に、十九歳にして英國に留學し、明治元年歸

朝してより、主として外交官となれり。其間、明治六年自ら發起し、福澤諭吉、加藤弘之、西村茂樹等と共に、明六社を起して、文化の開發に努力せり。さて彼は、明治十九年に勅令を以て、帝國大學令、師範學校令、小學校令、中學校令及び諸學校通則を發布せり。日本の教育制度は皆、之れに基礎を置く。而して以上の學校令の根本精神中には、國家主義の色彩、最も濃厚にして隨て、官立學校興隆の氣運大に動かされたり。尚、以上の諸學校中、森の最も力を盡せるは、師範教育の改善にして先、一府縣には必ず、一個の尋常師範學校を置くことゝし、順良、信愛、威重の三德の養成を目標とし、兵式体操を奬勵し、剛健、規律の德を勵まし、生徒は悉く、軍隊式の寄宿舍に入らしむ。想ふに、我國の師範學校教育は、今なほ、大体上此時の改正に準據せるものゝ如し。又明治初年以來、幾多の變遷ありし大學教育も森時代に至て、今日の帝國大學となり、帝國大學は、大學院と、分科大學に分ち、法、醫、工、文、理の五科を置く。農科の綜合されたるは、明治二十三年なり。

森は着々系統的に、我國教育制度を整頓して、其面目を一新し、長く我學制の發達の基を作り、其功績頗る顯著なりしも、彼れの歐化主義は、反動思想の爲めに、反感を惹起したり。明治十七八年前後、國語改良論の盛んなりし時、彼は日本語を廢して、英語を用ふ可しとの議論を爲せりとか、伊勢太廟參拜の際に、不敬の行爲ありたりとか云ふことにて、一部の人々の惡む所となりしが、明治二十二年二月十一日、帝國憲法發布の日に、西野文太郎の爲めに刺殺せらる。

然り、明治十年の西南役に於て、歐化主義者の勝利となりてより、西洋崇拜熱は次第に旺盛となり、明治十七八年より二十年に至り、クライマックスに達す。歐化主義者は凡ての方面に改良を叫び、事の如何に拘はらず、國の風習を改めんとし、特に歐化主義者の舞踏會の毎夜の如く、鹿鳴館、東京倶樂部などに行はれ、紳士淑女の相抱て躍るの光景は、長く男女七歳にして席を同うせずの主義にて陶冶せられたる、日本人の感情を害することは甚だしく、こゝに反動として、國粹保存主義の擡

頭を促せり。明治二十一年、杉浦重剛、三宅雪嶺、井上圓了等は政教社を起し、雜誌日本人を出して、大に國粹論を皷吹して、歐化主義を攻擊せり。しかも、國粹論の第一聲を擧げたるものは、西村茂樹にして、彼は明治十九年十二月、東京帝國大學の講堂に於て、日本道德論と題し、三日間に亘り、公開講演をなしたり。其講演の要旨は、儒教を根本として、西洋文教との合致を計らんとするに、ありしものゝ如し。こゝに歐化主義と、國粹論との表面上の衝突が、到る所に演ぜられ、教育者は其歸趨に迷ふものあり。依て二十三年國會開會の機を以て、教育勅語の煥發を見たり。爾後、日本の教育は、其大方針を之れに仰ぐことゝなりしが、一部キリスト教者の間には、之れに服從せざるが如き態度を持するものあり。由來、キリスト教徒の間には、國家主義に反對するものあり。例せば京都同志社が、明治二十二年の天長節に、祝意を表せざりしが如きは、其一例なり。明治二十四年、第一高等學校に於て、講師内村鑑三の敬禮拒絶事件あり。非常に學生等の反感を買ふ。又此頃牧師なりし押川方義外五名が、郵便報知新聞に、發表せる意見の如きも、頗る激越のものにして、御眞影を禮拜せしめ、勅語を記せる一片の紙に向て、稽首せしむる如きは、教育上利益なきのみならず、一種の迷信を養ひ、卑屈の精神を馴致せしむるものなりと論じ、若し天皇は神なりとして、之れに對して宗教的の禮拜を强ゆるならば、吾人は死を以て之れに抗せざるを得ぬと迄、極言せり。かゝるキリスト教者の非國家的、非尊皇的の言行は、甚だしく國民の反感を買ひ、こゝにキリスト教と教育の衝突問題が、騷がしくなれり。其第一聲を擧げたるものは、井上哲次郎なり。之れより此問題は、一時、學者論客の賛成、反駁頗る盛んなるものあり。由來、明治維新の鴻業は、西洋文明の刺戟に依て遂げられたる姿なるを以て、たとへ、國粹論を唱ふるものと雖も、決して西洋文明を、悉く拒否せんとするものに非ず、宜しく、國粹は國粹として、長く保存し、其上に西洋文明の長所を、採用す可しと云ふに過ぎず。又教育と宗教の衝突問題にしても、多くの論者は、キリスト教の全体を

葬る可しと云ふには非ずして、嘗て佛敎の踏み來れると同じやうに、宜しく、我國体と合致せしむ可しと、云ふに過ぎず。されば維新開幕以來、上下國民間に流るゝ西洋崇拜思想は、決して消長せるものに非ず。當時日本人は、其實力を試錬するの機會に遭遇せざりしかば、果して自國の實力の、如何なる程度にありやを、感知せざりき。否、恐らく世界各國も、殆んど日本を以て、東洋の珍らしき一孤島位に見たるのみ。

然るにこゝに、日本人の實力を試む可き事件發生せり。明治二十七八年の日清戰役是れなり。其海陸共に、連戰連勝せることは、世界の驚異なるのみならず、日本人自身も實に、意外とする所なりき。こゝに日本人は、一大自覺に到達せり。一大自覺とは何ぞ。當時支那は、衰へたりと雖も、東洋の大國にしてまた、我國と同く西洋の文物を輸入し、其陸海軍の組織また、西洋流にして、我國と異なる所なきのみならず、其海軍々艦の如き、定遠と云ひ、鎮遠と云ひ、之れを我國の旗艦、松島と比すれば、殆んど二倍大の噸數を有する、堂々たる戰鬪艦にして、形式上より云へば到底、我海軍の勝利は望む可からざるものなりしに拘はらず、黃海の戰に、一擧敵艦を滅沈せしめたるが如き、抑も之れを如何に解釋す可きかと云ふに至て、こゝに端なくも、三千年來、我民族の血液中に流れ來れる、大和魂なるものを自覺せり。此自覺は實に、國粹論者の、決して、盲目ならざりしを立證せり。それが一種の思想として、表面に顯はるゝに至りしは、明治三十年頃にして、高山林次郎等の日本主義卽ち是れなり。是れより浮薄なる西洋崇拜主義迹をひそめ、國家的、國民的、帝國主義は、國民全体の信奉する所となれり。又日清戰役の結末をつけし下關條約なるものが、端なくも此日本主義、帝國主義を激刺する結果を生めり。其は卽ち當時の三國干涉なり。

三國干涉は、我國が日清戰役に依て、かち得たる遼東半島を、清國に還附す可しと云ふ、橫暴無禮極まる干涉なりき。されど、如何に大和魂を信ずるものも、當時

の日本の國力に依り、歐洲の三大强國露、獨、佛を敵として戰ふの覺悟は、爲す能はざりき。萬石の涙を呑んで、遼東半島は、清國に還附せり。こゝに我國民は實に遺恨骨髓に徹するものあり。帝國主義は、完全に日本人を抱擁せり。中にも露國が日本に遼東半島を還附せしめたる、表面の理由を全然無視して、己れ自ら滿洲の地に、勢力を張り、利權を恣にし、傍若無人の行動を敢てす。これより十年、我國民は、臥薪嘗膽、露國を膺懲するを念とし、其凝結せるもの發して遂に、明治三十七八年の戰役となる。此戰役も亦、我國は國家を賭しての大戰なりき。歐洲五大强國中にても、露國は、當時、陸軍の大に於ては、其隨一に居り、海軍もまた、英國に一歩を讓るのみ。然るに此大戰もまた、豫期せる所よりも遙に、好成績を擧げ、戰へば卽ち勝ち、攻むれば必ず取るものとの信念を增せり。たとへ旅順要堡の陷落には、豫想を裏切り、幾萬の犧牲を拂へりとは云へ、陸には奉天、沙河の大勝あり、海には一擧遠來のバルチック艦隊を殲滅せしむるあり。世界は全く豫想を裏切られて唯啞然として大に驚異せるのみ。これより日本は、期せずして、世界强國の列に加へらるゝに至れり。

想ふに明治大帝の、最も力を用ひたまひしは、陸海軍の發展擴張と、教育の振興とにありたるが如し。隨て、日本の教育は、大体上、大戰役を、一大轉廻機と爲せるものゝ如し。則ち、明治二十七八年戰役の結果は、啻に凡ての教育方面に、發達を促したるのみならず、從來兎角、閑却せられたる女子教育に於て、一大進歩を認む。男子の中等學校は、當時各府縣とも、二三校づゝ之れなきものは無かりしも、女子の中等學校は未だ、甚だ振はざりき。然るに此戰役後、高等女學校は少くも一校は、各府縣ともに、之れを置かざる可からざるものとなれり。次に三十七八年の戰役の結果は、又大に教育の振興となり、中學校、高等女學校は到る處に增設せられ、爲めに教員の不足を來たして、教員養成機關の、擴張を計らざる可からざるに至り、小學校も益々盛んとなりて、就學歩合は九十六パーセントを算す。まさに英

米を遠く凌いで、獨逸に肉薄せるなり。それが近く、大正五年より七年に亘る、世界大戰の爲めに我國富は、異常の膨脹を來たし、其結果は、學校の增設大擴張となり、各府縣爭ふて、學校の增設を計り官立學校もまた、中橋文部大臣の時代に、十七の高等學校、三十一の專門學校の新設を見たり。今や我國には東京帝國大學を初め官立の綜合大學八、單科大學八、高等學校二十五、專門學校五十六校を數へ、之れに慶應、早稻田大學を初めとする公私立大學並に專門學校を合せ數ふる時は世界何れの國に比するも、其校數と學生々徒數に於ては、遜色なきものとなれり。

第三節　私學の隆盛

眼を轉じて私立學校の狀況を見るに、明治の初年より、功利的實用主義と、キリスト教的人格主義との、東西相對立して、兩々一時は、官立大學を壓するの慨ありしは、教育界の一奇觀たるを失はず。前者は、福澤諭吉を以て唱首とし、後者は、新島襄を中心となす。福澤は、豊前中津藩士にして、蘭學を修め、次で英學を學び安政六年、幕府の使節に隨ひて渡米し、文久二年、再び使節に隨ふて歐米を漫遊し慶應三年、三たび米國に遊ぶ。歸朝後、志を官途に絶ち、慶應義塾を立てゝ、之れが經營に當り、傍ら著作を出して、新思想の指導者を以て、己が天職となし、終世渝らざりき。慶應義塾の創立は、慶應四年卽ち、明治元年なりしが、同年五月、江戸上野の戰あり、人心騷然たりし際も、彼は泰然自若、ウエイランドの經濟學を講じて、止めざりしと云ふ。以て其自信の厚かりしを見る可し。彼の主義とする所は徹頭徹尾英國風にして、功利主義の倫理學を奉じ、獨立自尊を重んぜり。福澤は、常識の人にして、學者型の人に非ず。隨て、彼れの著作言論より、高尙なる哲理は聞く可からず。唯彼は、時勢を洞察するの賢明あり、舊習一洗の機運に乘じ、平易なる文章を書きて、歐米の新智識を弘布し、天下の思想界を風靡したるの點に於ては、我國古今獨步の人と云ふ可し。西洋事情、世界國盡、學問のすゝめなどは、重な

る著作なるが、中にも學問のすゝめは、當時未だ、讀書界の狹かりし時代にも係はらず、七十萬冊以上賣れたりと云ふを以て、如何に社會の歡迎を受けしかを知る可し。其初篇を出せしは、明治五年二月にして、九年十一月に、第十七編を出して完結せり。冒頭には西語を引き「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」と述べ、人權の平等を論じ、進んで國家も亦不羈自由なるものなれば、他國の侵害ある時は、世界を敵とするも恐るゝに足らずと云ふ。人間は自由と權利、義務を知る爲めに、學問の必要あるも、眞理の爲めに眞理を研究すと云ふが如きは、福澤の採らざる所なりき。其立脚地は、何處迄も功利主義なり。彼の功利主義が、如何に徹底的なるかは、彼れが、我國の古事記を暗誦するも、今日の米の相場を知らざるものは、世帶の學問に暗き男なり、經書史歌の奥義には達すとも、商賣人の法を心得て、正しく取引を爲し得ざるものは、之を帳合の學問に拙なき人と云ふ可く、數年の辛苦を嘗め、數百金の旅費を費して、洋學は成業するも、獨立の活計を爲す能はざるものは、時勢の學問に疎き人なり、此等の人は唯、文字の問屋なり、飯を食ふ字引なり、國の爲めには無用の長物、經濟を妨ぐる食客なりなど、云へるによりて知る可し。又楠正成の湊川に戰死せるは、南朝の爲めに何等利益の無かりし點に於て、下男の主人の金を失ひ、申譯なしとて、首をくゝると、何等撰ぶ所なしなど云へるは、隨分極端の功利論と云ふ可し。

一方新島襄は、上野安中藩の人。測量學、航海術を以て幕府に仕へたりしが、元治元年、米國に遊び、キリスト教を研究せり。彼れは宗教々育により、我國の教育を改善せんと欲し、明治七年歸朝し、翌八年京都に同志社を創立せり。横井時雄、浮田和民、海老名禪正、小崎弘道、德富猪一郎等、少壯有爲の信者其下に集まり、校運大に隆盛に赴く。新島は稀れに見る高潔なる人格者にして、彼は人間はたとへ、物質的に如何に豊なればとて、完全なる生活を遂ぐること能はず。健全なる信仰と、高尚なる品性とを具ふることが、人間の根本義なりとの主義の下に、精神的特色ある

教育を施せり。されど元來が、武士の生れとて、彼れの情意の根柢には、武士道の意氣と國家的精神と流れ居りしかば、彼れのキリスト教主義は國粹保存論者などにすら、反感を招くが如きこと少なかりき。同志社の隆盛は全く、彼れの人格の賜物と云ふ可く、明治二十三年、彼れ死して後の同志社は、日本の教育界に、重きを爲さざるものとなれり。

想ふに、明治の文教には、常に智德体の三育鼎立の唱へられしに係はらず、動もすれば智育の一方に走る弊ありしが、其は兎も角、新島の同志社の餘光、未だ衰へざる時に當ては、日本の文教は三大中心を形成せるものゝ如し。一は東京大學を中心とせるもの、今二つは慶應と同志社なり。東京大學は、智識本位の學校の本場となり、日本の官吏は此大學に出るもの頗る多く、之れに反し、慶應は、實業界に成功せる出身者多く同志社は、幾多の人格者を輩出して、キリスト教界に貢献せるのみならず、日本の文教に、精神的の洗禮を與へたるの功は、沒す可からず。

かゝる三角關係も、經濟上其他の關係の爲め、次第に帝國大學の優勢となり、今や數に於ては、私學必ずしも官學に讓らざるも、實力に於ては、到底之れに及ばざること遠く、昔時の三角關係は、今や昔語りとなり終らんとす。

さて、三十七八年戰役により、世界の日本となりてよりは、日本人の思想界は、頗る複雜多樣のものとなり、また昔日の如く、一の大潮流ありて、之れを總括すること困難となる。明治四十年の頃より一方にニーチェ主義、本能主義、自然主義などの唱へらるゝかと思へば、一方には、尊德主義、武士道主義などの高唱せらるゝあり。社會主義もまた、三十年に早くも、義友社によつて火蓋を切られ、四十三年には、幸德傳次郎一派の無政府黨の陰謀發覺して、大に世人を警倒せしむるあり。されど、國民の最大多數を支配する思想の、教育勅語を標準とする國民道德は、牢固動かず。實に邦家の萬歳の爲めに慶す可きなり。

教育學要論　終

昭和七年四月二十日印刷
昭和七年五月一日發行

定價 金參圓五拾錢

複製不許

著者 大阪府中河內郡布施町永和 伊賀駒吉郎

發行兼印刷人 大阪市西區阿波座中通一丁目共 荻野伊太郎

發行所 大阪市西區阿波座中通一丁目共 日進舍

伊賀駒吉郎氏著書

一、心理學原論 全三冊 菊判 三千頁
一、感情教育論 全一冊 菊判 八百五十頁
一、心理學要義 全一冊 菊判 九百頁
一、東洋四千年史 全一冊 菊判 九百頁
一、日本教育學 全一冊 菊判 千三百頁
一、女性大觀 全一冊 菊判 九百頁
一、文學寶典 全一冊 菊判 千百頁
一、最近心理學講義 全一冊 菊判 四百五十頁
一、三都比較大阪研究 全一冊 四六倍判 千五百頁
一、日米比較感想錄 全一冊 四六判 三百三十頁
一、心理學新論 全一冊 四六判 五百三十頁
一、教訓文學 全一冊 菊判 四百三十頁

終